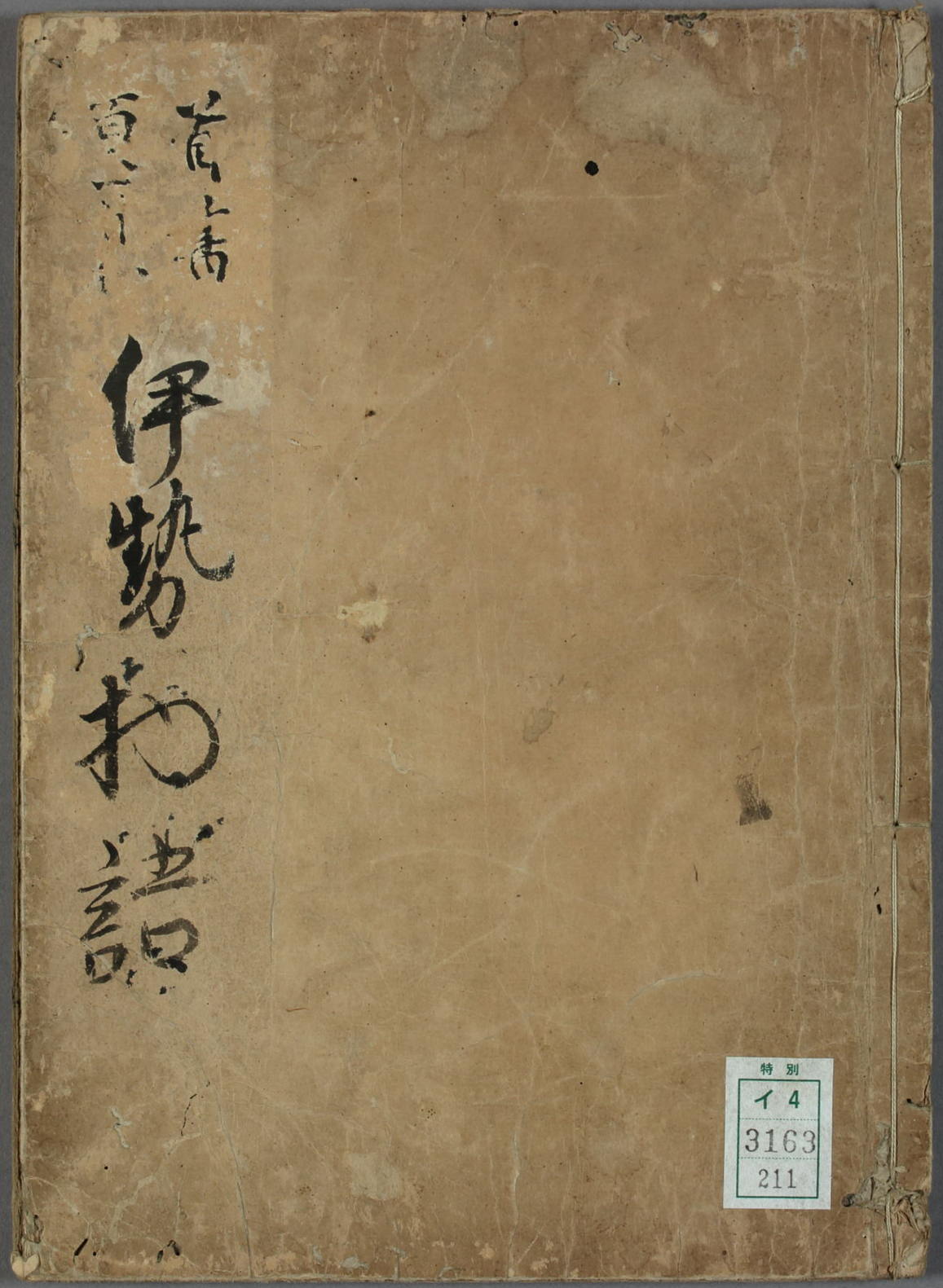

百六十八
伊勢物語
特別
イ4
3163
211

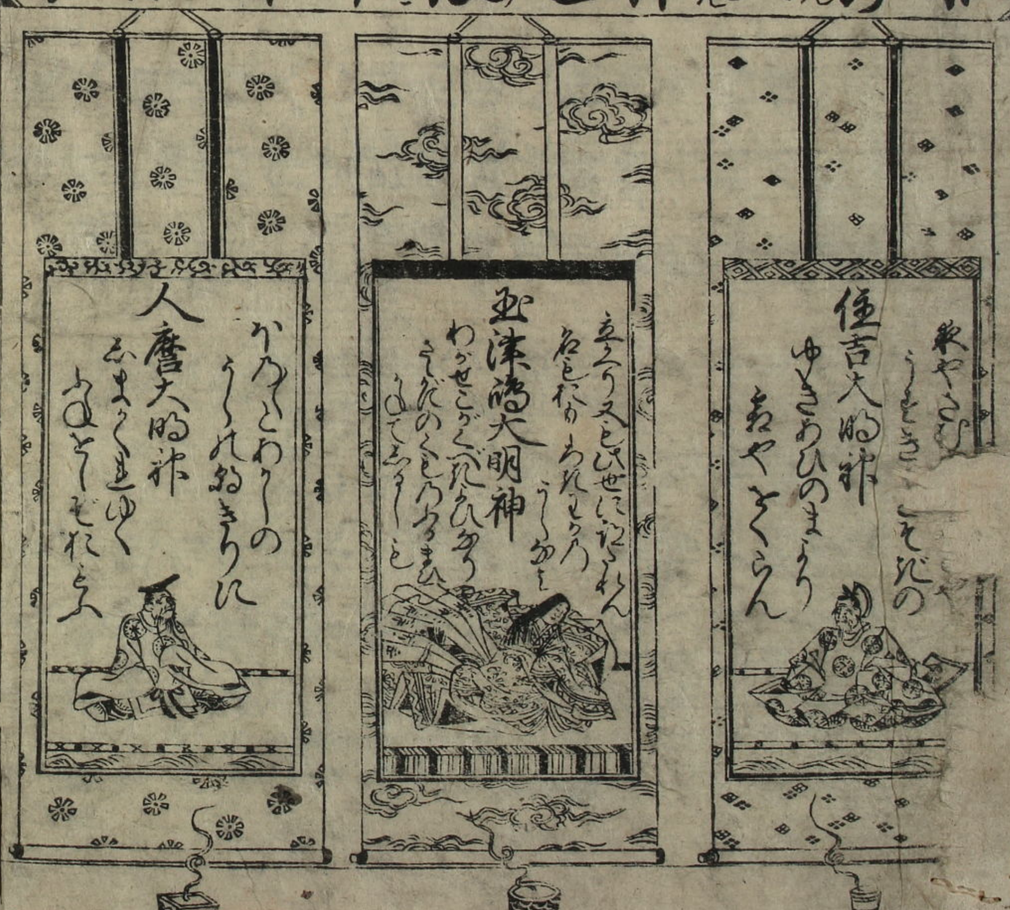
貴 14-3163

▲住吉大明神　摂津住吉郡にまします上の御八洲の神たち今集にあらはれ出たる社記八幡宮とあげたてのいれおんれ来由の迹垂式神名帳神社考ふ

▲玉津島大明神　紀伊国名草郡にまします玉津島の神たち

▲人丸大明神　播磨国明石郡にまします人丸の忌日まで毎月十八日に人丸の忌日まで毎月十八日に

和歌三神之像并御供可



菅原家文庫

歌仙

伊勢物語　よみこくせ　并に

○百人一首歌仙　○三十六人歌仙

▲六段　伊勢の国に伊勢物語の筆作せるひとり男ありけり　▲七段　むかしをとこありけり　▲八段　むかしをとこありけり　▲九段　むかしをとこありけり　▲十段　むかしをとこありけり　▲十一段　むかしをとこありけり　▲十二段　むかしをとこありけり　▲十三段　むかしをとこありけり　▲十四段　むかしをとこありけり　▲十五段　むかしをとこありけり　▲十六段　むかしをとこありけり　▲十七段　むかしをとこありけり　▲十八段　むかしをとこありけり　▲十九段　むかしをとこありけり　▲二十段　むかしをとこありけり　▲二十一段　むかしをとこありけり　▲二十二段　むかしをとこありけり　▲二十三段　むかしをとこありけり　▲二十四段　むかしをとこありけり　▲二十五段　むかしをとこありけり　▲二十六段　むかしをとこありけり　▲二十七段　むかしをとこありけり　▲二十八段　むかしをとこありけり　▲二十九段　むかしをとこありけり　▲三十段　むかしをとこありけり　▲三十一段　むかしをとこありけり　▲三十二段　むかしをとこありけり　▲三十三段　むかしをとこありけり　▲三十四段　むかしをとこありけり　▲三十五段　むかしをとこありけり　▲三十六段　むかしをとこありけり　▲三十七段　むかしをとこありけり　▲三十八段　むかしをとこありけり　▲三十九段　むかしをとこありけり　▲四十段　むかしをとこありけり　▲四十一段　むかしをとこありけり　▲四十二段　むかしをとこありけり　▲四十三段　むかしをとこありけり　▲四十四段　むかしをとこありけり　▲四十五段　むかしをとこありけり　▲四十六段　むかしをとこありけり　▲四十七段　むかしをとこありけり　▲四十八段　むかしをとこありけり　▲四十九段　むかしをとこありけり　▲五十段　むかしをとこありけり　▲五十一段　むかしをとこありけり　▲五十二段　むかしをとこありけり　▲五十三段　むかしをとこありけり　▲五十四段　むかしをとこありけり　▲五十五段　むかしをとこありけり　▲五十六段　むかしをとこありけり　▲五十七段　むかしをとこありけり　▲五十八段　むかしをとこありけり　▲五十九段　むかしをとこありけり　▲六十段　むかしをとこありけり　▲六十一段　むかしをとこありけり　▲六十二段　むかしをとこありけり　▲六十三段　むかしをとこありけり　▲六十四段　むかしをとこありけり　▲六十五段　むかしをとこありけり　▲六十六段　むかしをとこありけり　▲六十七段　むかしをとこありけり　▲六十八段　むかしをとこありけり　▲六十九段　むかしをとこありけり　▲七十段　むかしをとこありけり　▲七十一段　むかしをとこありけり　▲七十二段　むかしをとこありけり　▲七十三段　むかしをとこありけり　▲七十四段　むかしをとこありけり　▲七十五段　むかしをとこありけり　▲七十六段　むかしをとこありけり　▲七十七段　むかしをとこありけり　▲七十八段　むかしをとこありけり　▲七十九段　むかしをとこありけり　▲八十段　むかしをとこありけり　▲八十一段　むかしをとこありけり　▲八十二段　むかしをとこありけり　▲八十三段　むかしをとこありけり　▲八十四段　むかしをとこありけり　▲八十五段　むかしをとこありけり　▲八十六段　むかしをとこありけり　▲八十七段　むかしをとこありけり　▲八十八段　むかしをとこありけり　▲八十九段　むかしをとこありけり　▲九十段　むかしをとこありけり　▲九十一段　むかしをとこありけり　▲九十二段　むかしをとこありけり　▲九十三段　むかしをとこありけり　▲九十四段　むかしをとこありけり　▲九十五段　むかしをとこありけり　▲九十六段　むかしをとこありけり　▲九十七段　むかしをとこありけり　▲九十八段　むかしをとこありけり　▲九十九段　むかしをとこありけり　▲百段　むかしをとこありけり　▲百一段　むかしをとこありけり　▲百二段　むかしをとこありけり　▲百三段　むかしをとこありけり　▲百四段　むかしをとこありけり　▲百五段　むかしをとこありけり　▲百六段　むかしをとこありけり　▲百七段　むかしをとこありけり　▲百八段　むかしをとこありけり　▲百九段　むかしをとこありけり　▲百十段　むかしをとこありけり　▲百十一段　むかしをとこありけり　▲百十二段　むかしをとこありけり　▲百十三段　むかしをとこありけり　▲百十四段　むかしをとこありけり　▲百十五段　むかしをとこありけり　▲百十六段　むかしをとこありけり　▲百十七段　むかしをとこありけり　▲百十八段　むかしをとこありけり　▲百十九段　むかしをとこありけり　▲百二十段　むかしをとこありけり　▲百二十一段　むかしをとこありけり　▲百二十二段　むかしをとこありけり　▲百二十三段　むかしをとこありけり　▲百二十四段　むかしをとこありけり　▲百二十五段　むかしをとこありけり　▲百二十六段　むかしをとこありけり　▲百二十七段　むかしをとこありけり　▲百二十八段　むかしをとこありけり　▲百二十九段　むかしをとこありけり　▲百三十段　むかしをとこありけり　▲百三十一段　むかしをとこありけり　▲百三十二段　むかしをとこありけり　▲百三十三段　むかしをとこありけり　▲百三十四段　むかしをとこありけり　▲百三十五段　むかしをとこありけり　▲百三十六段　むかしをとこありけり　▲百三十七段　むかしをとこありけり　▲百三十八段　むかしをとこありけり　▲百三十九段　むかしをとこありけり　▲百四十段　むかしをとこありけり　▲百四十一段　むかしをとこありけり　▲百四十二段　むかしをとこありけり　▲百四十三段　むかしをとこありけり　▲百四十四段　むかしをとこありけり　▲百四十五段　むかしをとこありけり　▲百四十六段　むかしをとこありけり　▲百四十七段　むかしをとこありけり　▲百四十八段　むかしをとこありけり　▲百四十九段　むかしをとこありけり　▲百五十段　むかしをとこありけり　▲百五十一段　むかしをとこありけり　▲百五十二段　むかしをとこありけり　▲百五十三段　むかしをとこありけり　▲百五十四段　むかしをとこありけり　▲百五十五段　むかしをとこありけり　▲百五十六段　むかしをとこありけり　▲百五十七段　むかしをとこありけり　▲百五十八段　むかしをとこありけり　▲百五十九段　むかしをとこありけり　▲百六十段　むかしをとこありけり　▲百六十一段　むかしをとこありけり　▲百六十二段　むかしをとこありけり　▲百六十三段　むかしをとこありけり　▲百六十四段　むかしをとこありけり　▲百六十五段　むかしをとこありけり　▲百六十六段　むかしをとこありけり　▲百六十七段　むかしをとこありけり　▲百六十八段　むかしをとこありけり　▲百六十九段　むかしをとこありけり　▲百七十段　むかしをとこありけり　▲百七十一段　むかしをとこありけり　▲百七十二段　むかしをとこありけり　▲百七十三段　むかしをとこありけり　▲百七十四段　むかしをとこありけり　▲百七十五段　むかしをとこありけり　▲百七十六段　むかしをとこありけり　▲百七十七段　むかしをとこありけり　▲百七十八段　むかしをとこありけり　▲百七十九段　むかしをとこありけり　▲百八十段　むかしをとこありけり　▲百八十一段　むかしをとこありけり　▲百八十二段　むかしをとこありけり　▲百八十三段　むかしをとこありけり　▲百八十四段　むかしをとこありけり　▲百八十五段　むかしをとこありけり　▲百八十六段　むかしをとこありけり　▲百八十七段　むかしをとこありけり　▲百八十八段　むかしをとこありけり　▲百八十九段　むかしをとこありけり　▲百九十段　むかしをとこありけり　▲百九十一段　むかしをとこありけり　▲百九十二段　むかしをとこありけり　▲百九十三段　むかしをとこありけり　▲百九十四段　むかしをとこありけり　▲百九十五段　むかしをとこありけり　▲百九十六段　むかしをとこありけり　▲百九十七段　むかしをとこありけり　▲百九十八段　むかしをとこありけり　▲百九十九段　むかしをとこありけり　▲二百段　むかしをとこありけり

○ゆうまーとをひべー▲六十段ちそうのうどんまんぢうとわまど仮をひうそ
うどんのとうこゆてさてめめそとうづくべー素とうくく○さーどいさあーどいく▲六十三段さふ
らうさひーうとうをゐとるくもわまどさぶーくうとうもひぶべー
▲六十四段うつたりうて皆ハうりてんまうでまうんでとうもひぶべー
▲六十五段もきこと教書ゆうとうもひべー▲六十六段めいたびかうがーとわどるべー▲六十七段ふびきとわどるべー
やかりぜんじのこことうもひべー▲六十八段やまとうざとよ
ひべーたれうゐん○そりまのもこりまのもてうもひべー○のうまりふうまいがとうもひべー○うん
とくずーーーーたまうんとめんとととひべー○うもうーたいらとうもひべー▲六十九段
ことぶうとわどるべー○こがをどうどうそうとうもどるべー▲七十段ゆこうるうどこのとうもひ
べー○ゆうどこのゆとゆどるべー○ゐかうんいかううどとうもひべー▲七十一段あゆくーわーあく
とうもひべー▲七十二段かどうてなんどうてとうもひべー▲七十三段おりいまういうぎことわどる
べー▲百段まらーとうざ孫とわどるべー▲百八段風ゆけばどだゆとうもひべー▲百九段こ
ひんとうんーーとをひべー▲百十段とうーゆゆーゆそとひらんとうもひべー○さるとーのけりと
わどるべー

古今和歌集序

なまじいに人の心を動かすことわざ
けるせいかはやまとうたなり
をりにふれことにつけてこころにおもふことを
いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける
ものはなにつけてかこころをなぐさめむ
ものはなにつけてかこころをなぐさめむ
ものはなにつけてかこころをなぐさめむ

苗村丈軒

○ひーー男ゆうゐうりーてなーの家ゆと
の墨ひ泊よーてかりよいふりぞうとれ
いとかまよめーる女とーーどとりひ男ひ
まんてうんおもかーどふるとしいとうて
なくてあうれがーてらまーどひよけり男ひさ
ひとるひーー衣ひとそをさりておどうれてる。
そ男ひんのびとれりーざゆとかんーざりを物
新古今
かとがーぴうひーされのとりこうと。
ふのびれうぶれうーざりもーーまど
とかんんをいつそいひりるうぶぐれり
ろうさとうーざりやれをひうん
ひとうのくれぶのびとりどりこれゆり。
古と
うぶれてあひーーれるーーなくれ

とふのれんだへなりぴうしんいらくいらえや
きこやびとなのんしるる　河内国大名　源融寛平七年薨七十三於在中將非業先達如何

二　若男のこころりなしこの糸ハこゝろもとび糸ハのの
あもまごさぐまごまごまごりるゆよのり糸ハ安
そりぞそ女せんまれりきぞんこらるる
んかんまらりるぴりのこもわぐりけ
らしそれとのまめ男ぐらわこうひてゆうさて
いぐそひろんぱハやよひの朔日わめてゞかれやりる
れさとせび祓とせぐるとわしてる
古今　をぬりわそなぐめてしつ
三　若男のこきりぴとりるぬりえひ元りこわと
そひわしばじぐりぞよ祓もしりん
ひぐれわれそでをしつも

柿本人丸
わしりのあるり
とのちぐり
なぐくしまを
ひとりうとゆん

ひあのれんあ月とあまてう伯人
かがくしくしいそんあるる
ぴとこそうまくりかくしあ
あるりおいせくこるるわ
なまこがぐりなくもこ
歌をいるんてて秋の歌
せくしれりうねてさ
うるきまひ
くりハねまこ
まぐさ
とこ

びしれこるる
うくりしてりの
糸りとりりさに
ちりりしてりる
いよりりを黒いと
かまあのりる女てりる
とこれりひ男りまて
まぐりる

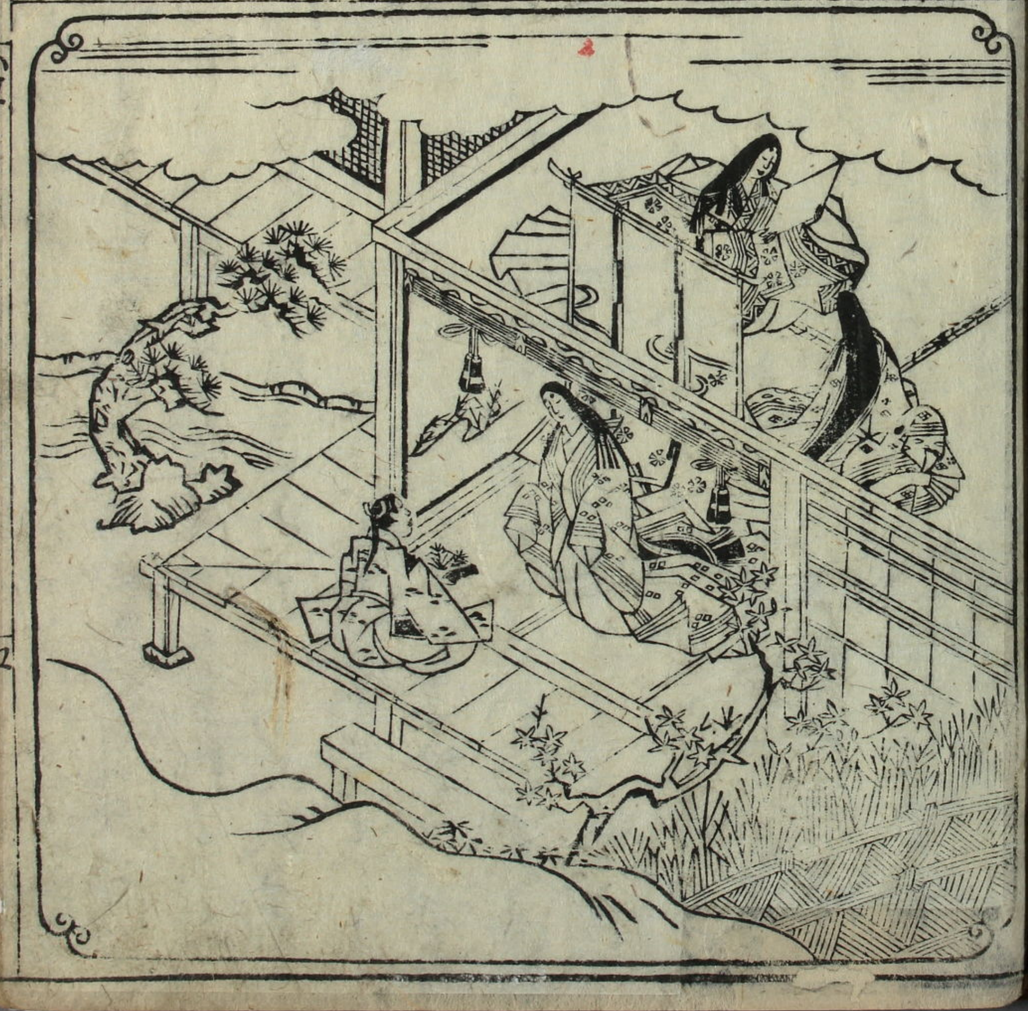
二条院さきさいのまごごとものがたりまつりまへぐらでんそおもてるときのことなり

(江) 若ぴんぐのゑにかきたるおのりふよとびんのきりぎれをしまいるおのりふよとびんのゑにかきたるとび月の十日どりれ程よりくまりやりぎおかさけどんのりのかのふべんぶるもわざとりれがおのをうとぴつゆんのるるのとりのび月よおれれざりれこそとひていさんたらてんぬくんぬんれどこそにぬるべくもわらびうんりれてわどーなるぴこれの月のぴうぐまぐぷせりてこそとぴおてぴのあ

月やわまやるのるなるぬ秋をひとつのものは

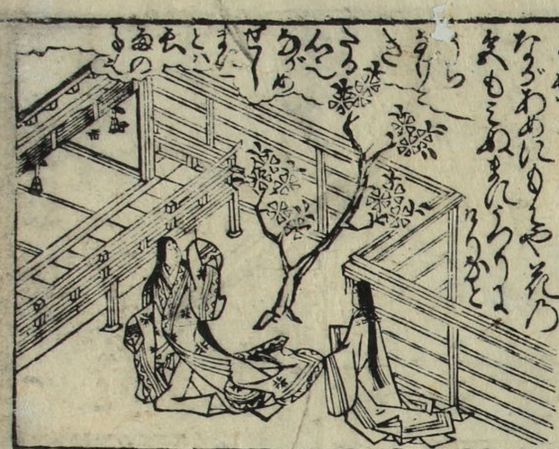
中納言あきなり
かさねのうちさせる
はつよわく
ちとり
ふわさとうれば
あぢはひけよろ

安倍仲麿
あまのはらふりさけみれば
かすがなる
みかさの山に
いでしつきかも



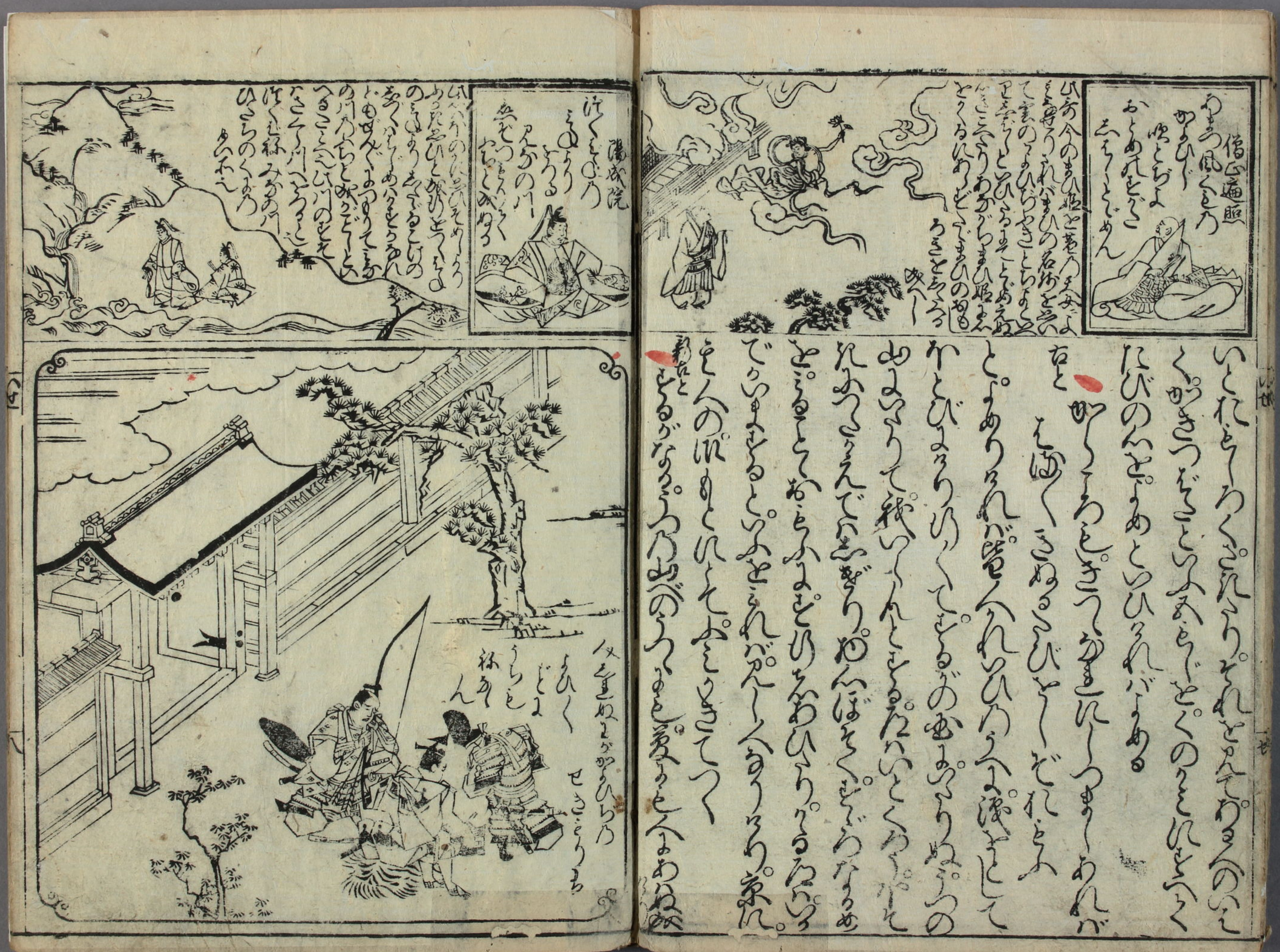
とよんで来りかのくとぬるひるくゆうよりうの
(又)若男のこうりびんでれそ家をうりたいと思の
びくびくうりみそらなるかまだどりもあ
いてでもかぶ屋のふこわけるついぢりくづまよ
里やひろうりびくもはねどあびるこの
れがわるじゆメ紙てそのひぢれ来ごとにんをも
てもせらればけどもえわでゆうるを梅のある
(人)まぬぢかのひぢりせたもうも
をと
ひくごようらも祝ひん
とよりうればいとしてう心やこうりびるじゆ
てうり二束の后よ思びて来うるとのきこと
ひうればせうどたりりまりせのひるとで
(六)若男わりうるを女のえうもうるとぬ

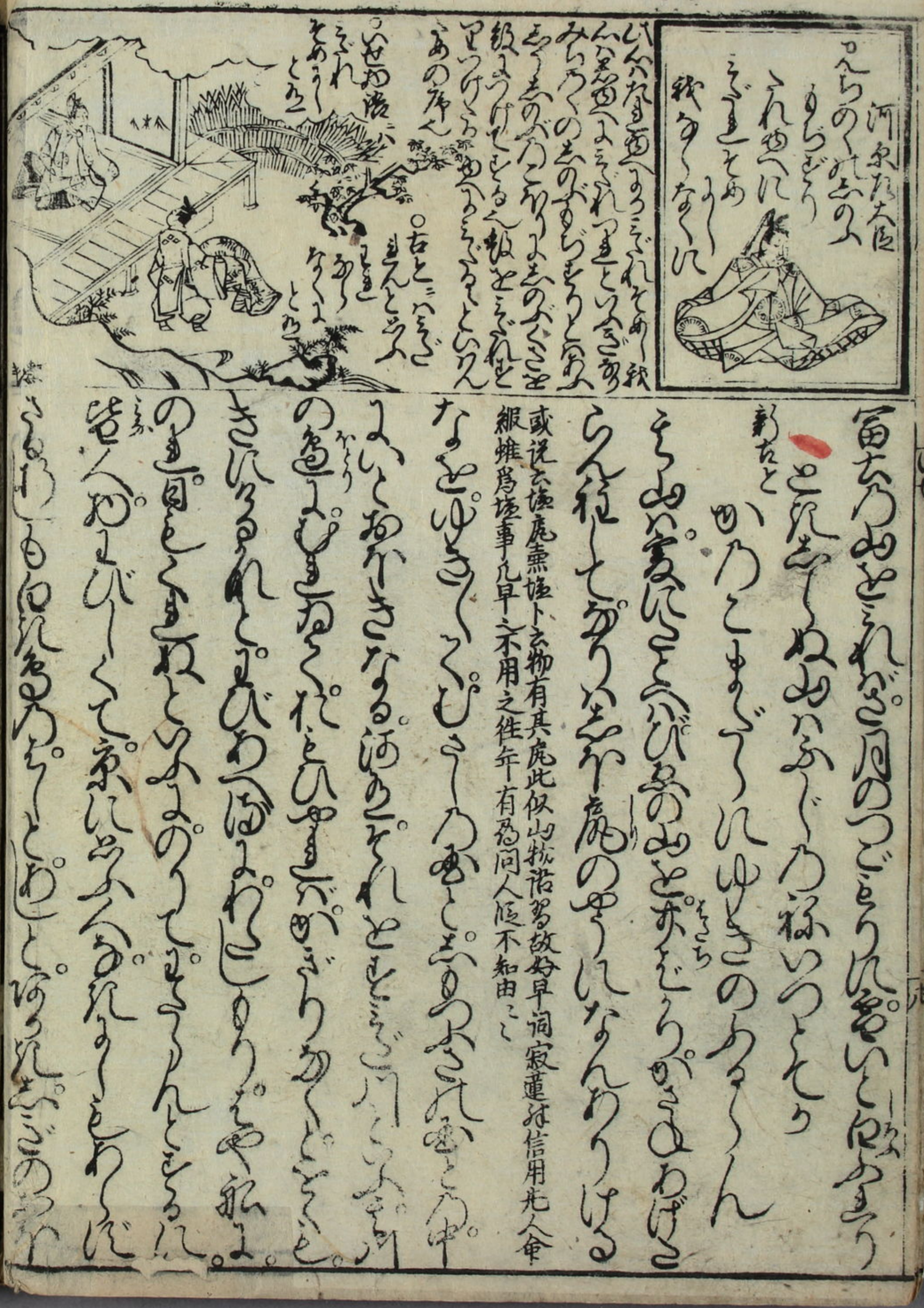
ひとりのぼうさとこれ出家のぼうさとの方角のつ
ちうぞとおもひとうひとく我がこころ
をこと葉をうるとのりあをうらふハ
まあるくいうこをあうきこれとしく
ゐをたすけをはるこんをやをそれば
我ハうく行ひ
さあるとこ



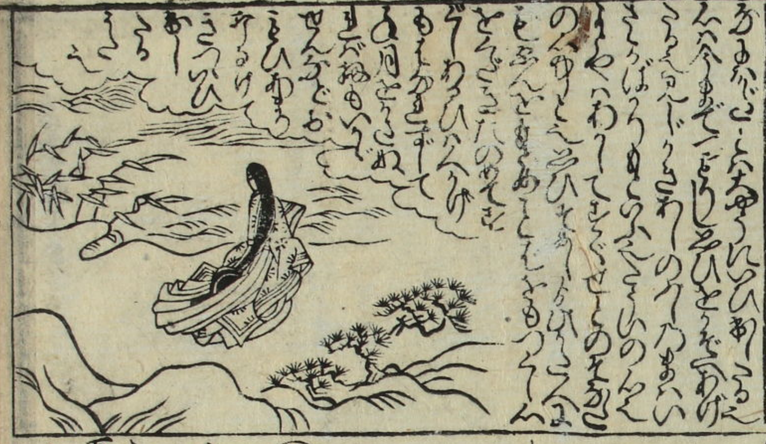
ひとりのぼうさハ花のさきてハ花
よりををかして人まるこゞ
ひとしこゝろしよりををれを
めゞしこゝろびくくわくくとうまよ
ぶれてをぐしろうちよ美の
なぐわあひもゝ花乃
矢もこゝあまれうりよ
うりて
さ
ゐ
ゐ
ゐ

蟬丸
これやこの
行も帰るも
わかれては
しらぬあふさかの
せきもりの
はこのうつり
やそ酒けて
こしかやぬと
人まつげよ
わきれつく紅
八 若男わりこ京やとこうりうんわづまろ
方よりて位ぬりしとそなしとるんひとりふ
らしていきろう伝法寺わさ毎ぶけよ極の三さん
ちかのなるわさ毎ぶけよろろろ
とらこむんのうやハとぶめん
九 若男ぷろうを男ぷをえうかびわよふひ
ぬしぷわづさのこよしべさぷ毎りと
ぷろわぷとうぷなとるんひとりわこ
つていきひうぷろきるんもなくてぷどひこ
ろうこ河ぷ毎ハこしぷふおよろりぬそこと八稽
こうひるるぷひぷのくぷどなれぷうとハここ
ひぶうくなんぷ稽こうひるぷこ流ろ毎のぷれう
ぷよどうぬくぷれひくひひうこうハよぷきつぶこ


信心遍照
湯殿院



きさなるあつかひどれわそびついをくらふぶうあこれ
ゐなれがみかをんあーらどぶとしらりれどひろれど
もかんぷやこぶわとしんをきてく
石あーおりぶさてんんやこぶり
わづれらふんちわりやなーやと
とよりうれどぶひこぞうをこぶんまろう
(十)蕎男ぶしうれをまぞぬぶひわりれりぬをを工
ゐるをとぶびひうれぶとんよわいせんとぶひきるを
毋なんわてなるんぶんつきうるを丈ぶな後人をて
ちてゐんぶぢーかるぶてなんわてかるんんてぶ
もひるぶびむしこぶひんをてぶこをうるをとひを
なんぶるもんりとりぶんうーの宝なりる
んとりだのひれうしひうるしを丈が有りをてるこ



ひこぐもくへ
わぐされぬるとなくかるたようて
なのむれりといつうまとまつん
とかんんのかまてもれてるやなんやまさりる
(十一)若男わづまへかるれ女蓮たよりたるはとさろ
もとなのよ花ちくもねよなりぬともも
そくゆく月のめぐりわまで
拾遺
(十二)若男おろりへのひとめどをくひさしのおそ
り花よ蓮人分うんがかのろこれぬ
かとがるのむてるのゆにどえてよげかりたるんび
ねるかどんわるとそかつんとと女とびく
ひさしかはなやさそとくされ
つらもとれわまもらもれう

と後ろのとがめてかとびりてどもれのでいるり
(十三)若ひさしなるかの男ふなるかりとしたさこれば
つひとかねいるしとかれくかきひとわ
ばとまてかこせてはとものとせどかよるれが京ろ女
ひさしわふこどんりけくれのじま
とへねもつくしとんをうねさし
とかっとみくなんかこれこらしろ
とへどいふとしはう ひすさしわざ
ひくはかりまやくはしねくん
(十四)若男こしのろ恋しねいらいうぞこ
なろかふ京ろんかつくれやれどしろんせらしいや
もはかんわろこれの女
中くよ恋ひおどぐはこふぐかへりろおれとたろ

行さへぢぬるぬれぎぬをかはくやはるのあまのすさびとぞいふ

りひんいさこそ袖よりぬれかくやはるのあまのすさびとぞいふ

東とわけごきつよとめなぞでごけれ

まぐれよなとさてせかとやりつる

とぷぷはれとと京へなんまろろも

ろろろ　われひはの人なしば

えやこひろつとんいさこいいしと

こうろれぬぬ　ひはのしてぷぷしこひろ

（十五）若みちのくの　ぷぷてぷぷとかきんのぷぷひ

るるわやぷぷ　ぷぷふくぷぷべれぷぷとけどぷぷれ

この人ぬぬ　ぷぷひてかぷぷぷぷこれ

んれうろりをくもんろるべく

女ぷぷなくぷぷぷぷとぷぷとるぷぷかぷぷ夷ぷぷとんぷぷいぷぷか

ひんもわりけけの月どもち

おつるぷぷるぷぷぷぷ東のざ

よわるどもうわさのろろ

今うんとぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷかぷぷ月の

ぷぷりぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

（十六）若ぷぷりぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

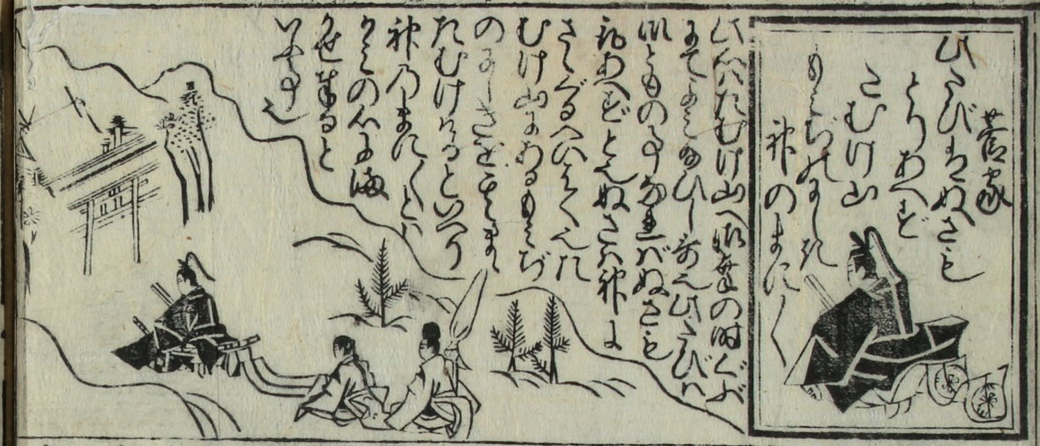
ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

ぷぷぷぷぷぷぷぷ

いのぶ法師
そでだにもとゝとゝとうハ
くるひさをたのこきぬ〜ん
くびやりけるバ
もやうわのゝ夜じべてそ
ゑんがこけ
ろこびしでス
秋やうの露やまぶかとこあつハ
(十七)年伝ぎうるくの
わゞたんうとゝとゝとゝ
とゝしひまれなるくもちけ
ふこゞわとゝとゝ
(十八)若ゝなまあ女あるう男ゝうあるゝ
しぶんゝとゝ

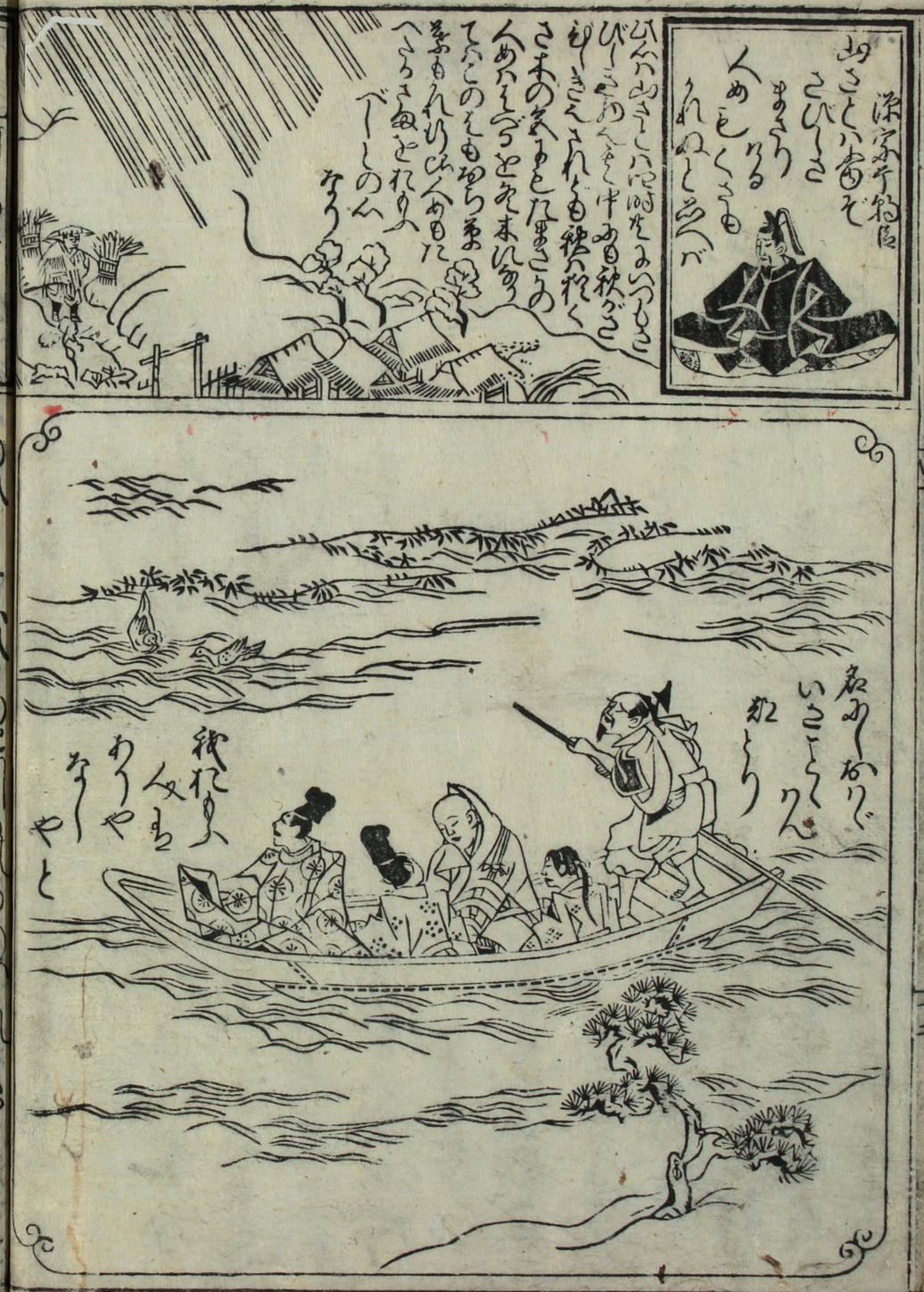


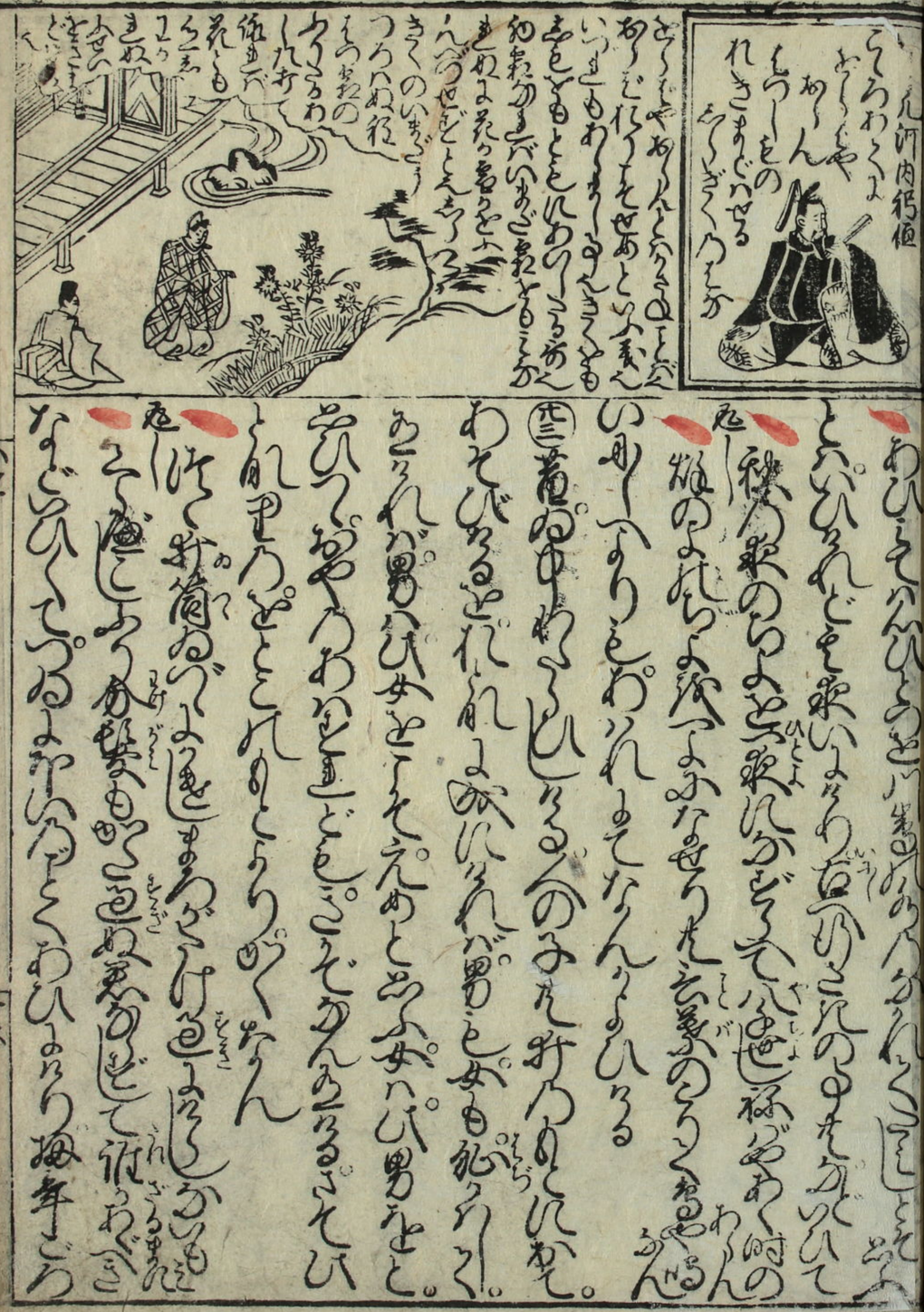
くまかのよりはじめ八ぢの社にまいるとも
れとこそ
なよ白ふぐりの人は美われるの人そでうもんの
十九 若男やぢ
ひをとらるる
のめをあるわ
わさ雲のよそ
とやあり
同 元雲れのそ
とのあり
二十 若男やまこれわるやとんくよびてわひよりう。
毎年へてこづ
うえぐのもらぢ

伊勢物語の八段

伊勢寺まゐりして

(六一)若男女いとうこくぴゐうてゞとんゐりゐり。
さるとぴうめくゐゐゐゐんいさてうなるゞとひつゐてゞ世の
中ゞとぴうゞとゞひゐてゞいゐんゞとゞひてゞるゐゞとゐんゐゐくゐ
いゞこゐれゐんゐるーーとゞひやせん　おゐゐゐ
せゐわうゐうゐ海ゞとんゐゐゐ孫ゞ
とゐゐゐとゞれゐくゐゐゐくゐゐりゐゐゐゐ女ゐくゐゐゐゐゐゐゐる
ゞとゞげゐゐんゐゐくゐゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐーんゐゐくゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ





わひしそうにんひとりのこ
とハ雪ハ人のうたりさんのみたそかひて
とハひろれども歌いよりわたりのうたのみたそかひて
秋ハ歌のらよりよりとも歌ひかどそてハ色ハ秋ぐわく時の
花のよれらよりよりつよふなをりた云葉のろくるもふん
いのりしよりもわれもそなんろひる
(九三)蓮の中わくらしるのみた野ハりもてひかて。
わそびるとれれよひれが男もを船ろく。
ろれが男ハひをとそえんめとろふをハ男をと。
ひてをやろわひとまどもさそをんろるさそひ
れ中ハりとこれりとろりをくなん
けて野蓮ハりてよりをまわるけるよりそしかりも
そ池ところかを髪もりまるをまをまりどて行わるき
なるひてるよりハりとくわひよりろ梅年ごろ

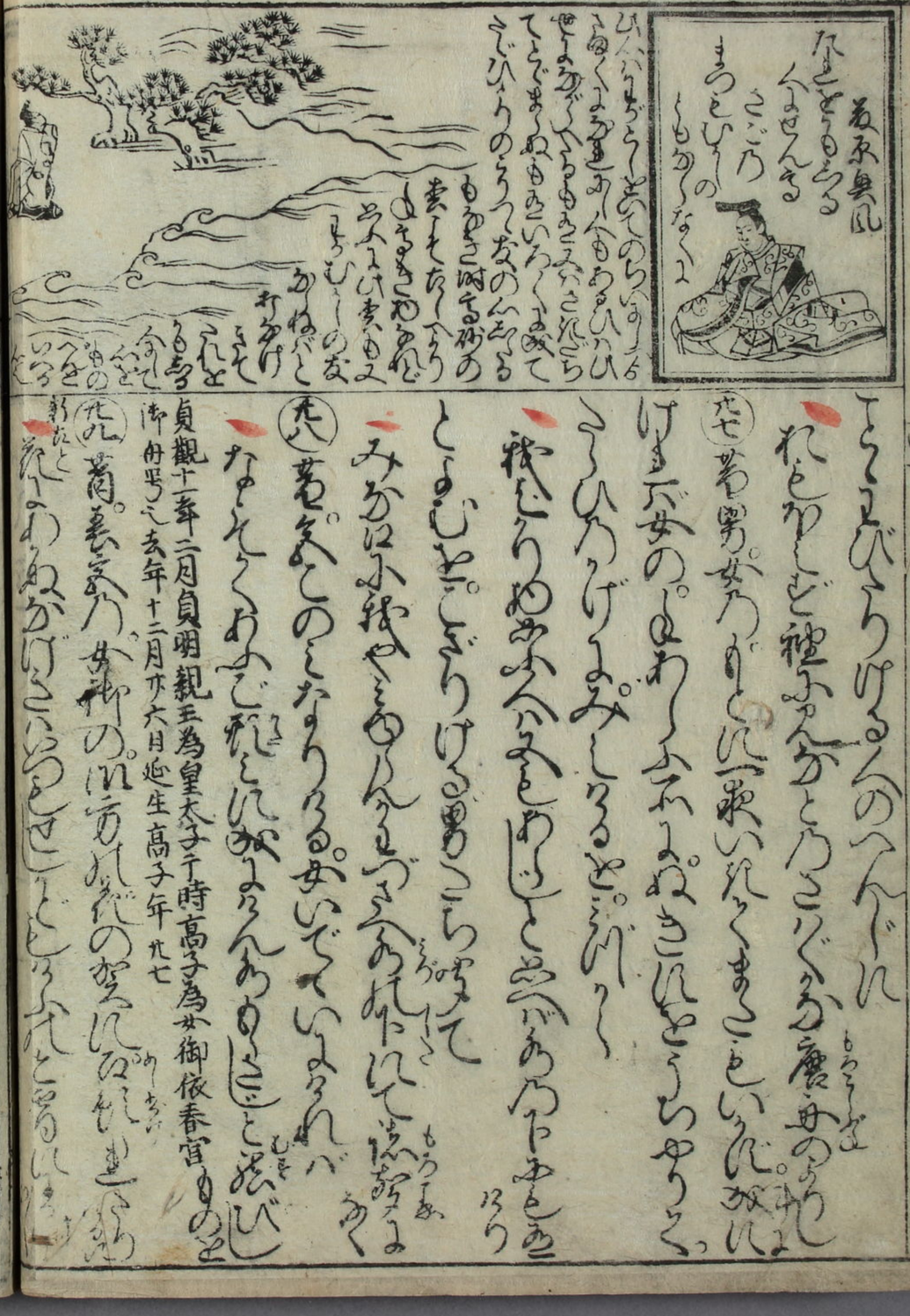
ふる花よ
いとひなくて
こゝろよい
もとの女わ
けも
ひてせんぶ
めてそれば
とよこそる
もいどめよ
はじめそん
ふうぶくひ

ひんいの門より風の来りをひま
なくふきけるなかの春ごと
となりてかぐれもあへぬて
風のけるまぐこいかれ
ものどとれがかぐれもあ
ぬるこぶけりと春と
とひまれとこへる
ぶれこぬ

ひんいあめ風より春のひるハ
まぶなりもハ日ひけり
ゆりくとあるよりるかひと
ぶるるのぐとなり
一年十二月の間も
なるよ春ハ春のぐハ
していもぐりけり
ちるぐとこ春ハ春
うくこぶひけり
ぶもえ春ハ春の
ぶぐんかりとな
ぶとてるべー

春ハとへぶわるり又ハ春ハいまハ春ハ
といひてぶんいるをふるしてやまと人ぶんといへ
ぶとまわるこびてまつて春ハびくとだれまだ
春ぶんこひ春ハ毎ハ春ハ
とひいるしどれこまだなりまるり
(十四)若男ぶ春ハこのゆ春ハ男ぶつくれそ
ぶれをしそりまるまにこせこぶりるれぶ
ぶびるりるるれぶいと会ハるるへぶのぶよひわん
ぶりるりるれぶ男ぶるりるれぶあけぶ
まへとぶるれどわけぶおとなんまぶ
春ハ春ハ春ハ春ハとぶとぶとぶ春ハ
とぶいぶーるりけまた
あぶぶるるぶるるとへ春ハ

とぶひていなんるりけまた女
あぶぶるひけどぶるるんいぶるりまわと
ぶぶひれどぶ男ぶるりまけりぶいとれしくてぶるよ
たるてぶひゆけどえとひるぶぶ春ハるわるれぶ
しるりぶるぶるるぶるおびのるてぶるける
わるひぶでれるるとぶるるぶ春ハとぶぶ
とるれるぶるこれるるぶるりる
(十六)若男ぶわるりるわるりぶるるるるるぶのぶ
ぶるるけるるるるとれるるるるるる
春ハ春ハるるるるるるるるるるるるるる
いるるるるるるるるるるるるるるるる
小町ハるるあなれ春ハるるるるるるるる
(十六)若男ぶ春ハるるるるるるるるるる女とえるるるるる



てゝとびらけるのへんぐれ

ねもかしこどゝ神ふん分とりさぐる唐毋のうれ

(九七) 若男女乃とに一歩いたくまこといたがれは

けまぶ女のぷよわふれよぬきにをうらやうく

うひうげ

ひしるをぷしく

秋ぢうめ

ゆめふくはをもめじとをぶあのかをもをいろ

とゝむをぷこをりけるまこうをて

みかはふ紙やゑんうをうをあれかて法師よく

(九八) 若気このこなうるぷいでていようれば

なをそくあをご花とれがよんあめしをとをぶじ

貞観十年二月貞明親王為皇太子二十時高子為女御依春宮ものを

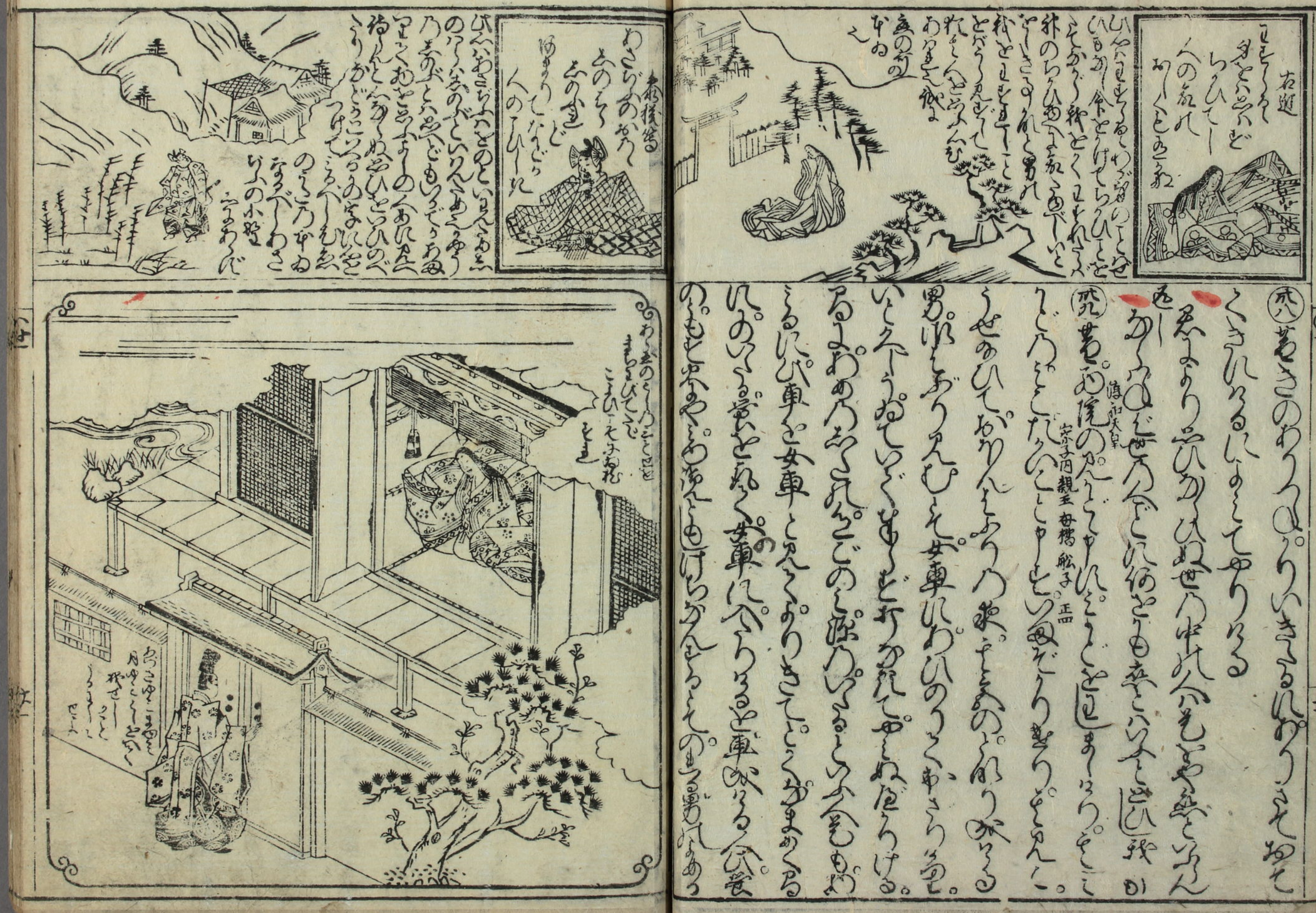
御母号之去年十二月廿六日廿七

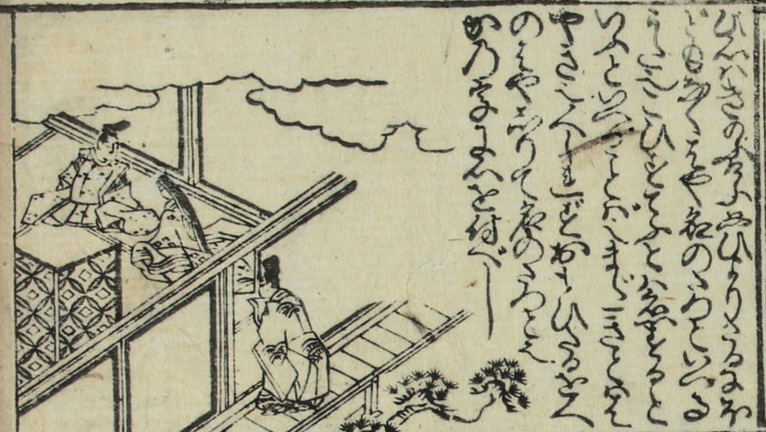
(九九) 菊。春宮乃。女御のぷ方花の賀にぬしまをあ

新古

花のかをかげさいらをせしをとをるれとるしを

(三十)しられてこぞつらかりける女がもとに
わすれぬ人のもとにとりやしてつかはしける
(四十一)君をのみ思ひねるこそらしけれ
ものうきかのこのまくらこそ
(四十二)ぬれてこそ
こぬ人をまちけれ長夏の夜のうつ
ごとにこそ
(四十三)ぬれてこぬ人をまつ女のもとにつかはしける
(四十四)おくれ
たる
(四十五)おくれ
たる
(四十六)おくれ
たる
(四十七)おくれ
たる
(四十八)おくれ
たる
(四十九)おくれ
たる
(五十)おくれ
たる
(五十一)おくれ
たる
(五十二)おくれ
たる
(五十三)おくれ
たる
(五十四)おくれ
たる
(五十五)おくれ
たる
(五十六)おくれ
たる
(五十七)おくれ
たる
(五十八)おくれ
たる
(五十九)おくれ
たる
(六十)おくれ
たる
(六十一)おくれ
たる
(六十二)おくれ
たる
(六十三)おくれ
たる
(六十四)おくれ
たる
(六十五)おくれ
たる
(六十六)おくれ
たる
(六十七)おくれ
たる
(六十八)おくれ
たる
(六十九)おくれ
たる
(七十)おくれ
たる
(七十一)おくれ
たる
(七十二)おくれ
たる
(七十三)おくれ
たる
(七十四)おくれ
たる
(七十五)おくれ
たる
(七十六)おくれ
たる
(七十七)おくれ
たる
(七十八)おくれ
たる
(七十九)おくれ
たる
(八十)おくれ
たる





おてかぢ取りぬぎとめ切り手ぬぐいをかぶりくへしい〜

きけ

いと長なぞ

（早）若ぷ男ぷ九男ぷげ〜うわ〜ぬをぷひろうさ〜ら

おめろてれろとこのころかぷそぷなとでわりろぷさ

ぬいたろぢがおれ

おかぢなりぷんころかいな〜

とるとわわうくぷひもそつてぷひをとやうかひやう

んとひさこそふまこひやうどぷかろなれぷきこふ

いきをひかそりろれぷでひるいこをひを（ぜ）ちやー

れんぷどまかを（力）ぷるひぷいいやまろりはまろるぷへ

れれやぷひをぷおひうつ男ぷろ八後をなぷせどをとぷて

しろのをぷおておくぷぬどこぷなく〜ろまる

おくいかが泡（ろれ）ぷこりんあるこのぷろ八（れ）

しぷのこてぷここのろりぷあろてひりれぷひてんれ

いひぷいくくしぷ〜じ〜ぷよんまろひぷこへ

ふろれぷまどひて乳ぷそろりぷ八ろぷわひじりひこ

入くぷの耳れぷわぬのくきどろりひんぷ〜ひてぷた

おろりるぷひうしのろうどぷるをけるぷわ三ひを

なんーろる八ぷろれまこれ〜なんや

（里）若ぷ男ぷ八ぷ〜ろりぷろりぷろりいやしぷ男ぷ

のまじれぷひろりなわくなる男ぷもりろりぷ平ぷ

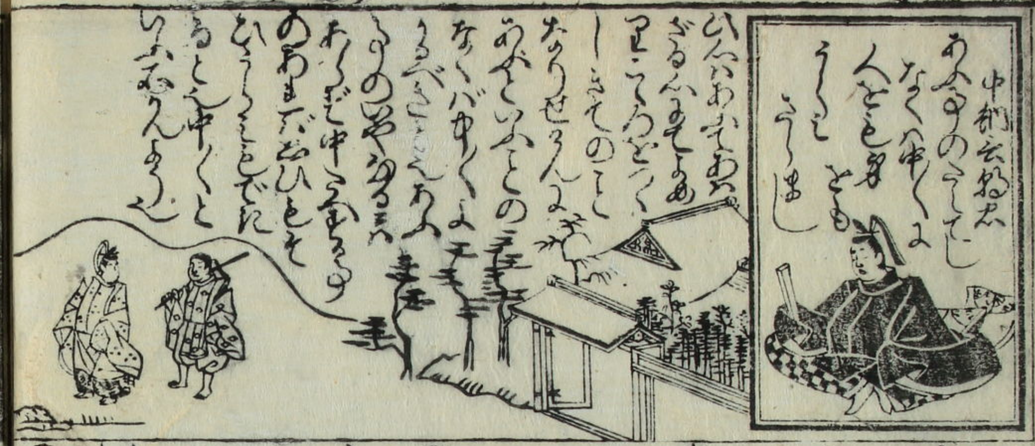
男ぷろるまぷをたぷ海ろ〜ぷう（の）ぷころぷわ〜ひてぷぷ

しろりるまぷんぷ〜ぷ（ぷ）ぷこれどろるぷ平ぷなぷまぷ

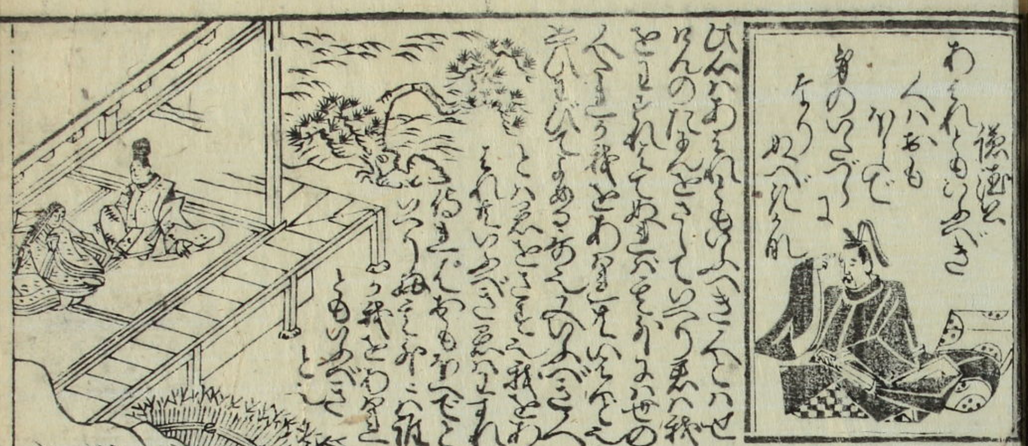
なぷ〜ぷりぷまぷ〜ぷう（の）ぷれぷてをろりろりてけぷ

せんろまなくてぷだでなをろぷれろりぷもをのぷてぷ

男ぷろそぷをろるろうれいをこうろ〜ぷろうこの

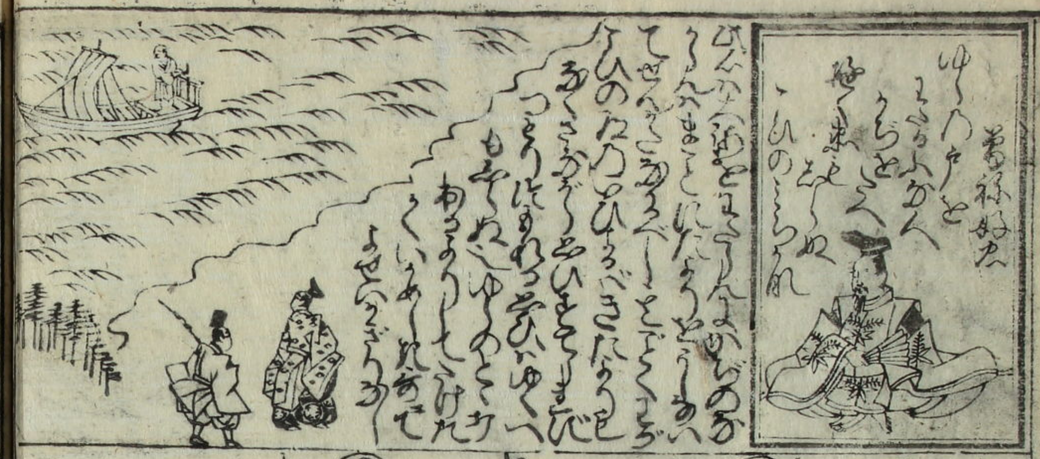


きて付くかゝるかとてさ次のぞとさてく
たと祁ひなのろかく美はまこゆとぶれるとまれぬろ知
とぞうこの女けゝしたとうりて
一名のようひそうたとさけさぞるいろわまことと
けるこ凡まなんみろるれゝこゝ
一いろうをきまぞりたとさかぬこのし
とがとひさとよゝふゝゝこゝどバ
四おわぐふへめんふるハたふひけせんそびそう
とんはぐぞうれ歌どしさろづたこせ女ハ。
ろうぞくづそんんれわるハ男。が貴てゆじんゆひけ
一おそひ美ぐあふとねだやまバ紙さかもりくかねべさ
ひあハぞこが申ふぞ
五若男ぞうり。ハひまめんゝくぞ男んハ



ひんハわれもふへきんとハせ
りんのたんどさしていりあハ紙
とゝとられてあまそかゝハせの
人ゝこう神とわかるそいとをこ
そひひてあるあこうのハぐこん
とハるとこゝとこ紙とあ
これたいハぐこるハとす
こ伯まであもわへでこ
いろうぬこかこハ紙
ものぐこ
とゝ

いんこそひろりぞらゆんのぞてゝやろりんハわゝ
めてとねべたゝきひぞゝそひこぞひろと紙ゆ
つけろゆなくうげろりれがぞゝひころりけまと。
ゝまけまバまてくよどとりけまぬこれ月の。
ゆるとあつたぞんろつかひよひハわそびろを変文
てやまでしたハんハきろりかるたうこびわろひ
ととこんふゝこんきろりて
仮題
一り雲雲乃ろの
一雲ぐこれこの月ぞまでハぬべくハ秋風ハとろひけこ
四若男ぞこしんたこりぞ涙こうひわハも
もひるとぞハの雲ハいきろをいとわれとぞて紙よ
ろう。月日色こぞ。ぞとゝるぞよわらゆくえこハん
せぐ月月色よるぞとゝとれゝやこのひとんこハ



うこゝろびてなんわるぞの中九人のうちんぐ
まれぬべきわれよこそわれとそうりんぐのこそ
めなどもあもかくなくよわそもはかけまの風
(四七)若男神ん法よりぐでとそ女のそうりぐれごひ男とわ
だかりと男そしつまちさのこまらりつつは
大ぬさの引ものわまこれかわまだ品どえこそたのまぐら
逸しれとこ
大ぬさこ石にそたてま流てとつねひるをハのてふねと
(四八)ひし男わうるぞろとかひけせんとそぐを
もちるるしこぐ
今ぞしぬるれわとんまるん
さとをべうんどとふべうそう

ひハハ八月ひぐるのとちるれ
もちんの月へうりともさびー
ろぐさよハけもんどをを
をうハにうちをていでわを
びーるわるら
ちこまろ
もとこ
きて
こ

(四九)若男いのうちぐとれしけるとんぐうり
うしうう孫のけよんゆるあくさを
人乃ひとびんとそれうりぐへ
しきこんうされなとめづしれこのを
うちなくわとれとひるれ
(五十)ひし男わこうりぐうるんぐうんく
うれこをとぐでとをるぬとも
れもハわ人をおふもうと
とうりけまだ
わるにかハきこのうてとありぬべー
れもうひをふのこそうべれ
又れとこ

ふく風みこぞりつさ〳〵はら〳〵ぞとも
あれふのごさんれてろハ
又もんかゑ
古今三作者 りうぶつよりどくうもとりなきこゑ
ゆくこゑづともぐゆのひしらるれと
まこれたもハぬ人をかもなりけり
いづまもすぐてふことをさくらん
わぶこゑ風ぞ吹ぬ春の夢びわしをとめ
(平二) ひしぶおこぞのせんざいのぎくうるよ
うへ〳〵いわれなきこれやりうぎくん
えこそらしめ祝さんれめや
(平二) 若男ぞのこるの作ぞなり粉をこやりきるぬ

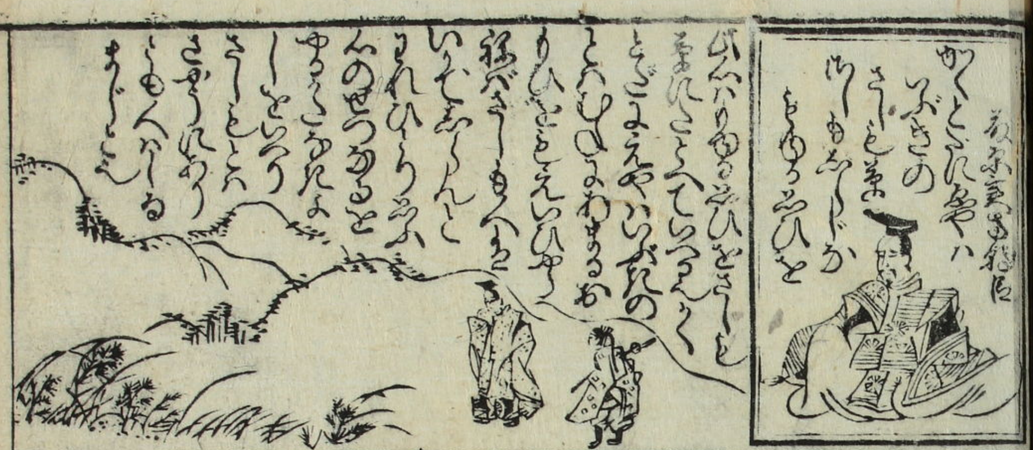
あやめりあいぬまあやぞまどひろる
れもこのひおくかるぞまびしれ
もしさうごとかんゆりろる

(五十三)若男ぷひごこれぬひてぷんなどゐる花ぷあるれば
いぞうへ名るれなこんんちまこど
れもふこてろもまごあろれこ

(五十四)しーぷ男ぷしまかりろるぷこいひりろる
りやぬゆめらをたぐるこまもまへ
わまつそこなるけあやぞくらん

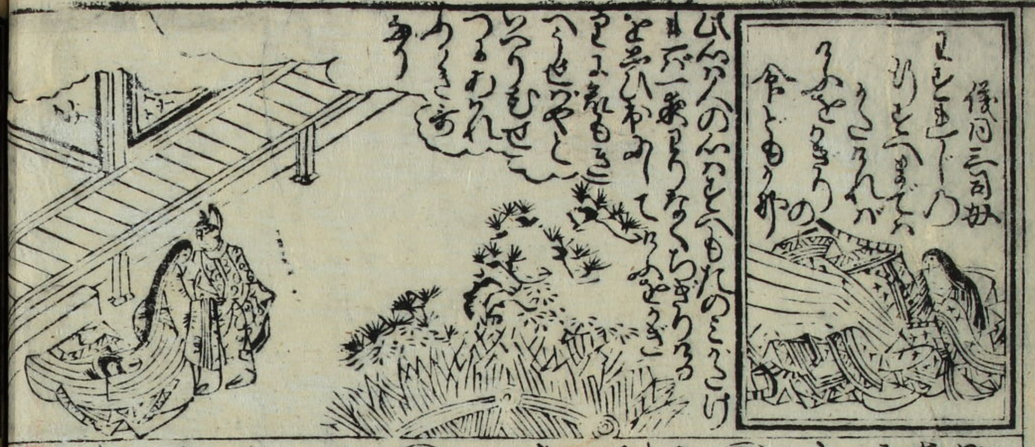
(五十五)若男ぷひけろぷ女ろぷうまぐうぷなりもものれ
れもつどるろもこめところをれ
わふーごれこのまもれ

(五十六)若男ぷてぷひぷおぷくぷひたりひぷまりて

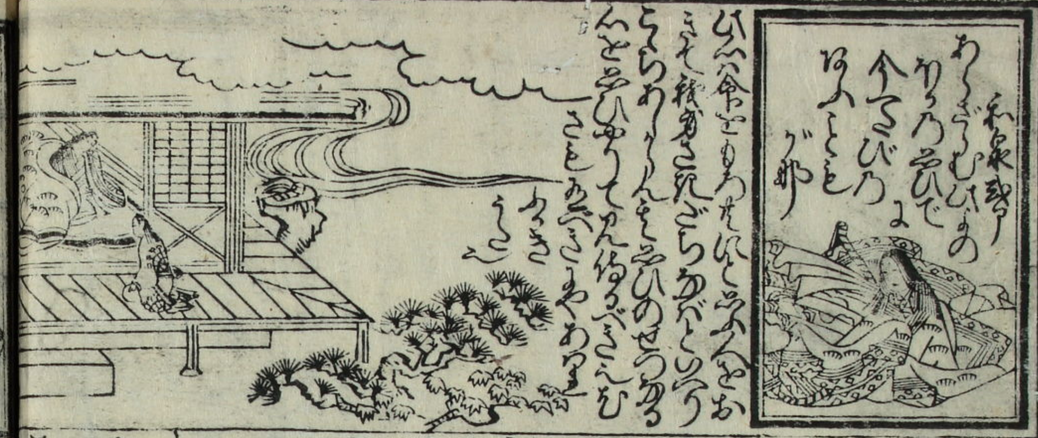


りあこひどくうと
もうなきころ
れともめ女を
かりふなり
ぬくぷうことぐるろれと
りるもれとのづま
まくてふ
ごとときくらん

わづそでとくらいかりれつ孫ごも
くはぬ山びにのれやりなりるを
(第七)ぢ男ぢ家ぢ
こひもびあわそひろぢ山なれ人のもしれ
れつ多ともしてごれつるれ
(第八)ぢ男ぢづきて家ごのこなる男ぢ男ぢとこれにもの
つうりてぞりまりそこりこれりなりるえづよ
こともなきぢ女ぢのおりめれば西りんそひ男
のわるとんくぢいうぢりどれものぢ家ぢやそわつ
まりうぢきうれば男ぢげぢくよつれうしば
古と わまひりう義つくの花なれ後ろんの者づもも
ぢひてぢまりぢ
ひぢ



かいつけんてゆ（ゆ）さらるひ（ひ）ゆ（ゆ）なりるひ（ひ）ゆ（ゆ）たちえとねく
なと　流れ　さ同ゆ（ゆ）れ情ひ（ひ）ゆ（ゆ）とゆ（ゆ）げ（げ）ゆ（ゆ）の（の）れ雑の（の）で（で）ゆ（ゆ）
とゆ（ゆ）ひ（ひ）るゆ（ゆ）ぞ（ぞ）ゆ（ゆ）ひ（ひ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ



とふとぴいとぴとぴとぴとぴくぴくぴくぴくもせでぬるとかご
ひとりもをぬとぴぱ涙ながしとがくしぬぬもみしどぬもいれど
もやはり紙のわかとのがれて年月重ねどまさりあれ
とひとりさぬぬぎそとぴくぴくせられどもそてげり
けりいづらいぬんんもてんび

(幸三)若せんつるぬいでぴかけわんん男ひ
えんしれとぴどいひんもたりあとれぴとか
らぬゆめぐらをたぴさんをびてらりるふら
のかいなくけかくぴくてやぬぴらんぴるま
なんよれいの男でいくんとわいるれひけれ
いとうくとんちぴとあらけぬいでひぴゆ中ね。
わいせしれとぴんんぴりあうれるよいさわひ
たそてるりくらとぴねてりくなんぴんとひれれば。

われりとさくれよりりさそはぬみしさらけ
ぱ男乃あるよいきそぴまんるると男ケのんて
百年よぴをせるねたくのぐ紙とらじ面ま
えいくるつけれをんてぴぐくかくらて
つとくぬよきそぴらふせう男の女乃せーやよ
えのびくぴたてうぴんまびぬかげきそぬくて
上与左こさしろよ夜とたてとひりや色きんあそのん
と懐るを男わんくぴひてそ歌ハ称ようぴ中
のまいとてぴんとぱぴひぬとぱぴハぬねとぴハと
てめをもれもてぬをもげらめせぬんかんるる
(歯)ひくぴれこぴんそんてくふどさもせぐりけ
まぱいづくちうんわやくさんんある
ぬ風よ紙身となきぱぬとでれ深りめて入ぬねと

大三三位
うまのいのり
そうこ風
ゆけを
いでそよんを
ことをまえ

やとてくれで待る
ようのあとさて
ゆくあての
月をうし

わうもそるひ
びぬべしとく
祢ぶ男りうに
まなく恋のう
よびて恋せど
へるまよひと
ようげよ
恋せどとそ
しひくなん
ひんどもの
んよりとく
もひそうな
てなくんし

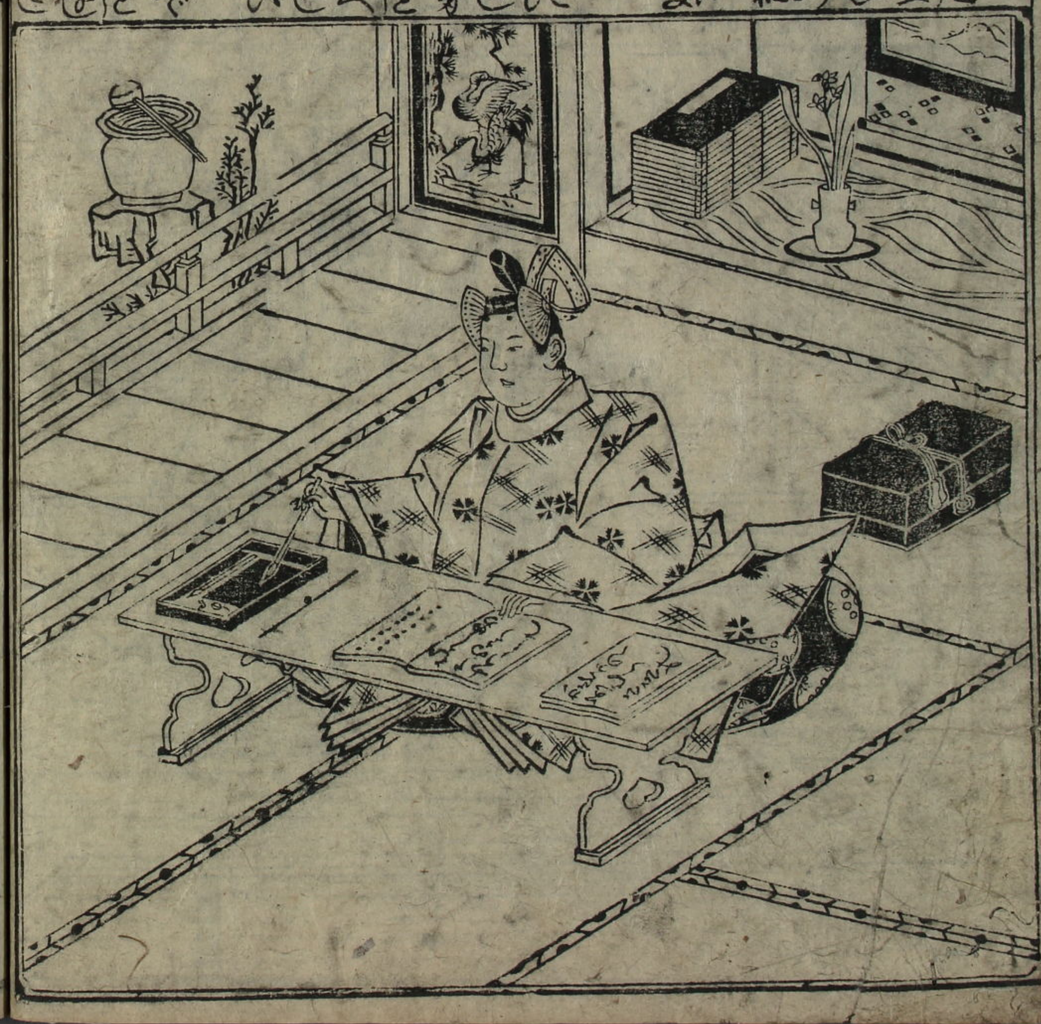
伊勢物語
伊勢ハ伊勢太郎殿の末孫
業平朝臣の後也位最高継蔭
のひとめ四郎の子也母は
八条式部卿の女
業平七条后宮に
忍つゝの女房と
のてうわひとゆく
おくりて伊勢の
本をよく伊勢の
女郎といふ歌ハ二条
洞院よりあと裏ハ津のくに
藤原法師の母也ハ古き和
とよりのうへよ伊勢
ものを

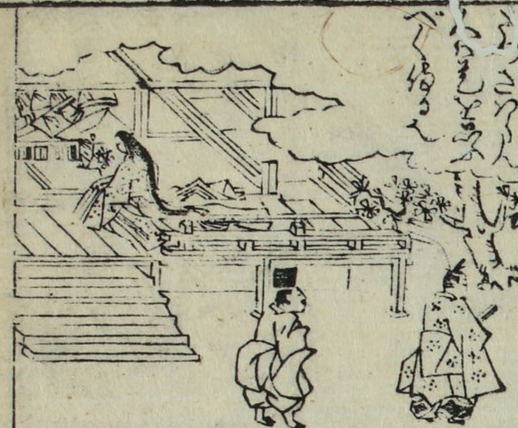
○世界なりひら伝記

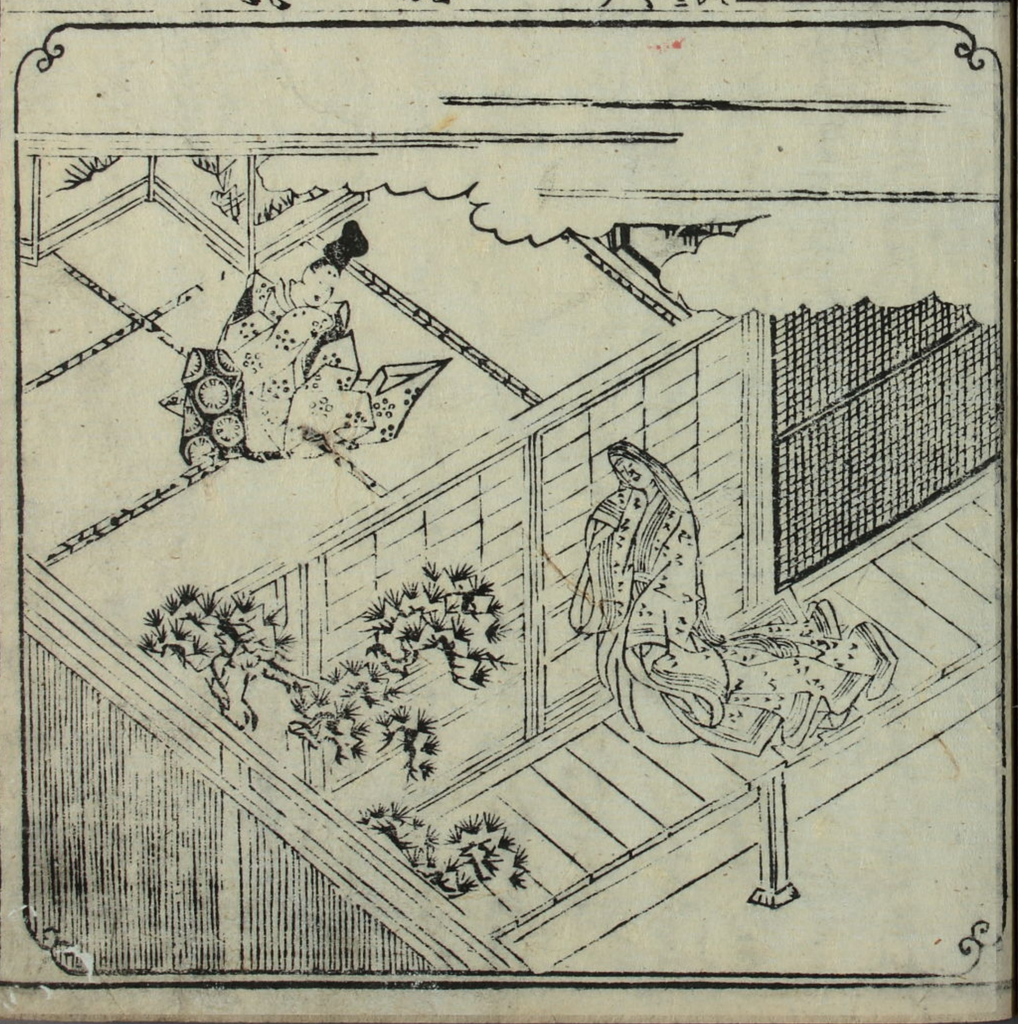
▲業平八年ぶんぐわ五月の比まこと
ゆえあり保胤主乃ふ男ゑ仁王
ふ十二代淳和天皇ゑ去二ゑ
四月一日ゆゑの涙ゆえ生まれ
えぶんに六十代仁明天皇れ和
七年三月十日年十六ゆゑ
逝去ハふ十七代陽成院えゑ
ぶゑ六月ふ八日ふ十四ゆゑ

○六歌仙傳人の大意

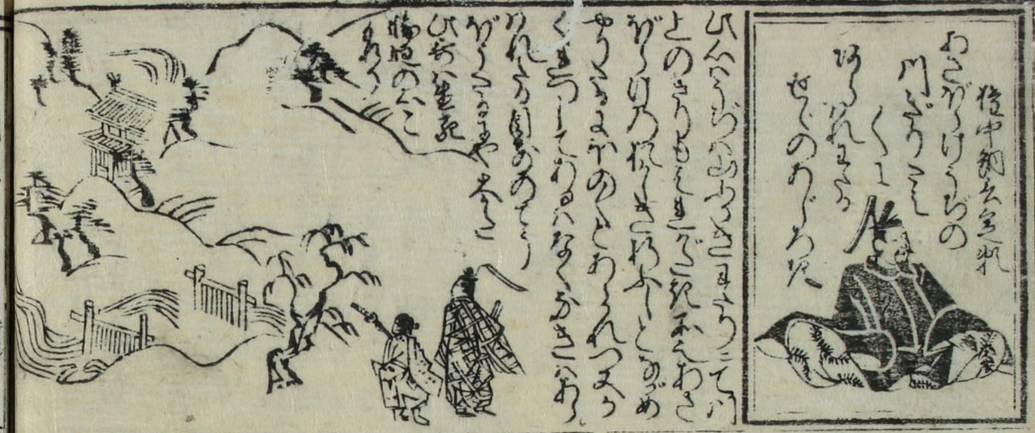
▲ふるひとくハそくんあるうれ句こと
ばのうつくしきゆえ色のうるゝ
▲文屋康秀ハ句ゑこれて色ゑ
ひとをとゝいて高人の紙きれ
▲ふ色ゑをこゝゆゑいたなでゆゑ
るゆゑの気ハげ事をめるゝ
▲小町ハおそれゆゑ世ゑ
ぶゑのゆゑめるゝ
▲在原句ゆをうけて位ゆゑ
秋の月をうるひゆゑ月の色ゑ
▲遍こゝの行ゑゑ
ゑれけかをとゝんゝ



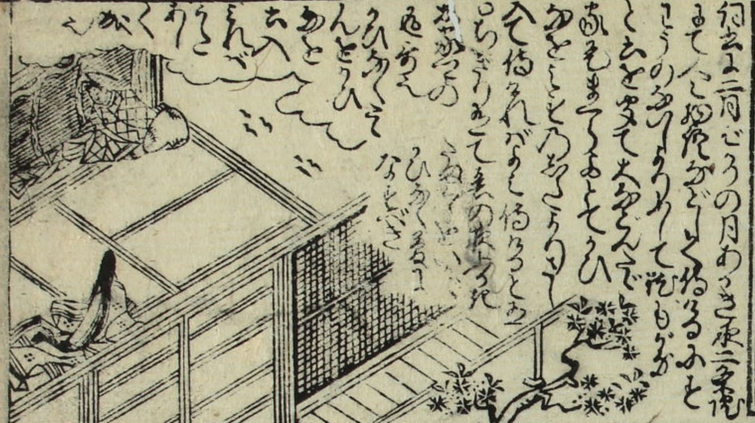


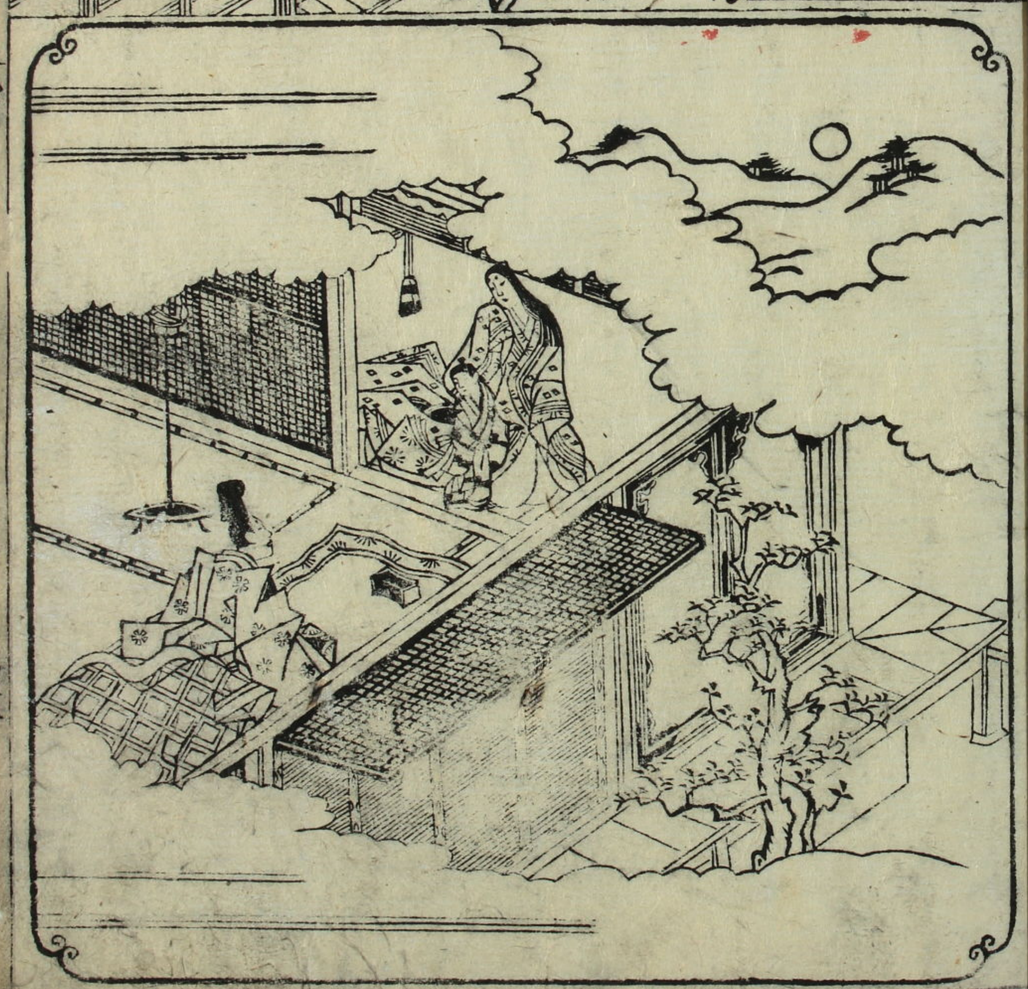


あれるる和ゆみどもすくなつまくびもとかが
しつまてるれば女ハいとこの家とふ女どもまで
させくるあこあてさりあるれんぐてまこのうとか
たと 曲侍ものあれるれ女ものもしぬ和ることもあせ
となのれこれば男ハ人乃世ろ歌でこれさうふえとい
とれりしくふこて女ハあるーうてで表ものふハ
るるつまびかいてこのなどそれるでかふ
とハさけどわひるれるもけでなんかるる
うとしとふ流て世こんもかるかぬ
とふひとり男るかーわるひとりれてのく
めぐりきくくふ
たと 伝説者 こづよりてこるるかあるんかるれこれ
ゆうとれかいおいーやとんれもそのあどれ



きさらかりうめ乗りうめ乗りうめ乗り





三笑は
ふるもとわらせ
ゑびす
かつぐべし
まこの月形

相撲のまくのうちとどまりて位
さうんしてさ芳ゐひろ八月のわ
うろるとぶ人下でしゐ世せまひ
るとんゐ乃八ぬうんれるゐゆく
いれ位ぢさうんとゐ石ゐりとひ
のかまれ乱も加ゐ八せゆぐこの
ふんちの月ひとろ石ゐ日芳
かまれんとん

祇園法師
わしゝくしもしろれ
山のりとぐ
とるゐ乃門の
みしきゐろろ

祇園法師ゐ位ゐ石ゐ乃ゐ
してこそゐの八ゐとぐうをゐ石ゐ
ゐよゐこ八ゐの門ゐこゐわゐひせ乱
ぐせわまとゐりゐうと林ゐ乃ゐ
とゐ八ゐよ
てゐせゐ
せうをゐ
ゐ化門の
関のかゐゐ
らのうし
いさのゐ
いろく
とゐ

ちまやゐの林乃
いづれもこしねべ
たまや人のまく
かしされ

ゐ
ゐしくハ
きそも
ゐよゐし
ちまやゐる
林の
いさしる
ゐなゐ
ゐく1

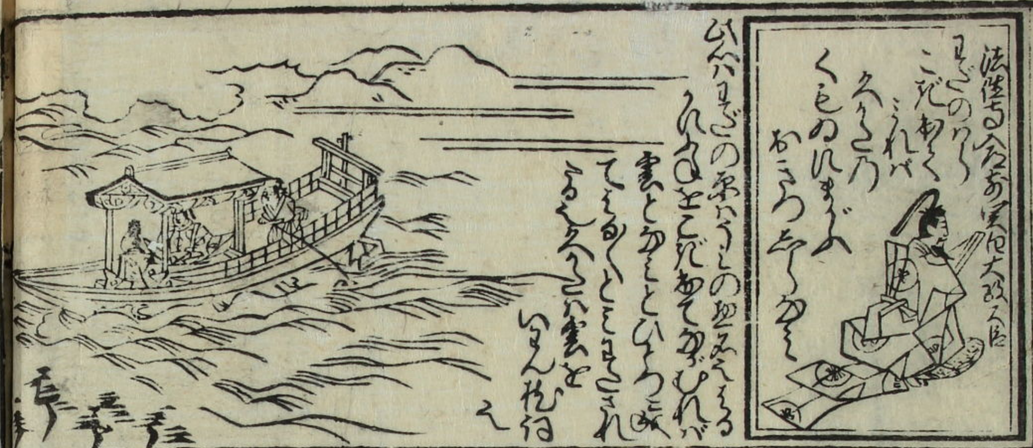
七十番男ゐりゐ

ひやぐりとぐいつれんの
ものもやれもとくばのいひけりる
新古今
うるあるあるーやいつそさはとて秋はどへよあるれ物あ
（七十一）若。男いせの物語の物語の内につひのそまのまとり
けもばめの内の内よりとれでこいひるる女もとづーとよて
拾遺入も
しつやある物のつづれもとこぬべ人の人のまくらさ
とーー
恋しばらそれもれんのしちやある物のいさしるれ物
（七十二）すーー男いせの物語の物語の内にるる女まこえわのでど
れうの恋へいくーーていとーーうーーんれが女
新古今
大ごの内恋ハうーくもはくなくよれてのともとの渡
（七十三）しーそこるはのとさけどせーそこどれ部
ふべくもわくめ女つわりとひる
万葉
めふんくるふーまあ月の内の梅のとれ恋よ
（七十四）しーーれとこのとーーうーんく

夕されはの内のしーーうーーんれ
まそるとれーーうあんあーのものや
とあ新古今
ーーとそこ恋のまへ田のしか
なーるタ雁の秋風
さーーーとーくーと
ーーとバ雁も
あしの
ものや
まーーく
ふぐーとー
もも

万葉
拾遺
男女ふし
（七十五）若。男いせの物語の物語の内にるる女
大淀の濱よれてふんるーーれはかれぬーーー

源後礼物
ちからくらべ
石大臣良相百光亭
(十九)若氏八幡宮
わるい先ぞうるさみしぬんどんせんとうれあけるぶ
なんぷありける
紙どんちいろわるる陸をうつのまびるを花ぶかくまぶ
もぶぶうんのみこぶ八ゆねしみとなんいひるわるの
山ろれうろとろうと
わんとろ
表のとうれを
うんとゆびし



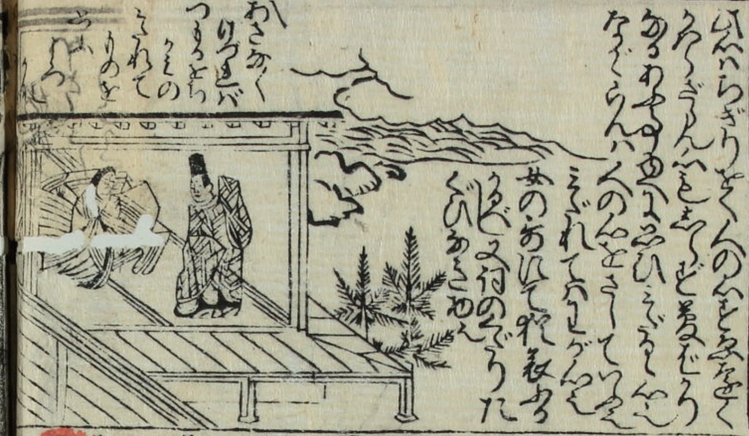
中納言ゆきひら〜の心をもめてたくなり

(八十)しらかとりてるるよ義の花ゆくるくみこ
ろうやひのつごもりにぞ日をそやるいの
りこへまうてまゝとゝてあるる

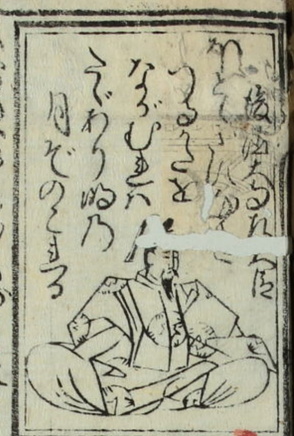
(八十一)若たのおやいまうらえぶさぞうあるも
ぬまつてどあのくはつる幸の四よ美いてもめしとこ
ぶ

花のひろり作者月の花ごりうぞ菊の花ろひ
さうあ
ぶ
ぶよ
ぶ
ぶ
ぶ

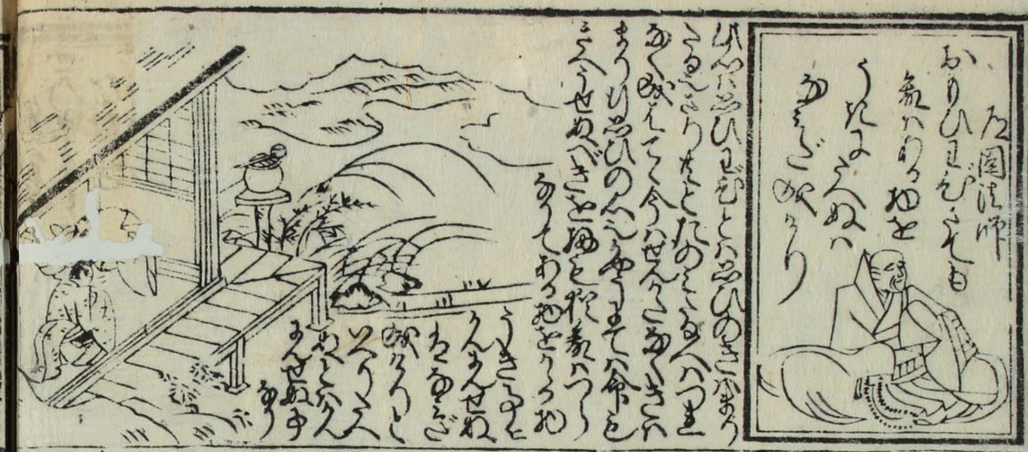
源重忠
あらぐまのうへ
ちるりのあく
てんよ梅ざめぬ
ちきりのせきもり
れ東吉文孔明
秋風よんかぐ
実乃こ孔
うり
れいづる月の
げのさやけさ



れとともにつくまつりそれがえ
ゆくすゑをせいこうさまんぞくをねがひとこ
わるのみこをひてへるひかんとしてるりはもげ
なんとそれがのむしまりこれがある
わらなくよゆうさきを月のくるらのをあげてはごもちうかん
人こひろうれてまうて紙ひろう。
卓峯雄選
（八十三）若みかせうの母ひまひこれうたこをかりに
おりしまとともにかるもよる義はうまつ月に
くえゆう拾ひてらくいかんとみかの
りられひろくおりれてつるぐりる月はるる深
拾ひてまり拾ひしのれうく



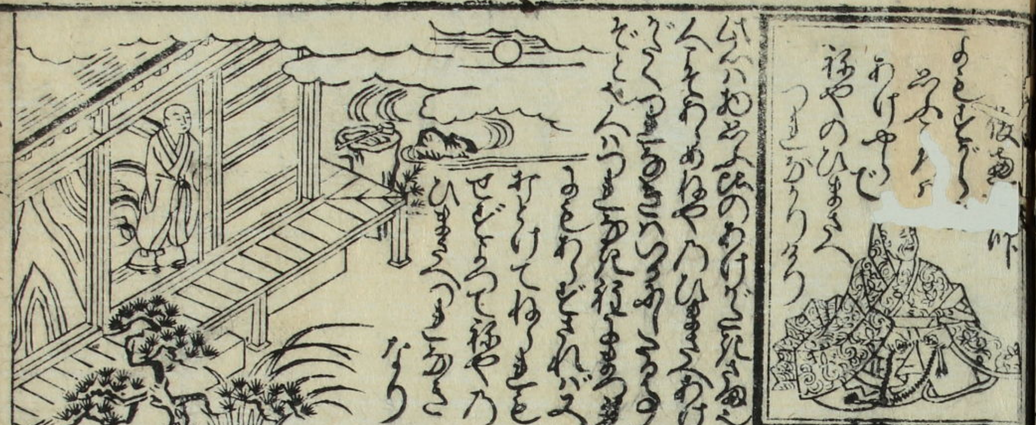
とのこるる時いふまりはるるみるるんこおかとのこも
らでわこのひてりりくしてまうでけりうまつりるを
異ひのかりふくしとりのみてぐりひ月のおりこた
てまりんとくふ拾よまりぐるるひえのみりかもと
なれが若いとろしまおそこむりよまりでくおりこなる
ひりまりとりわるをしてをしまりれがをしく。
さりけりりりなどりひりくりりりこりりて
もりりり



ひかりをあらそふ
ひのさかり
なれとも
今はせんなし
ものかなと
ぬしなきやとの
ものかなと
ながめて
ものをこそ
おもへ

（第五）

さんぬれば
ぜんこうの
ひかりわ
さるれども
ぜんこうの
ひかりを
ぬすみ
ぬすみ
ぬすみ



なるべくこも多ぜとけねばあれせぬ者ハうるで我ハなるし濃うるれがんこいとうそ義ぐり祝そ出ぐねぐ出ぐ

(十六)者ぺとしてハ男ぺうきを女とわひこうりりぺとのく新

みうれいぐんくひとしてやこれうり年ひへて女のりよ。

粉ぐとちこ事ハ世ぜるしわしいのぐ面ぐ年のわ面ハ

ことこれ事ハ新ぐ

とそやこれうり男ぺ女ぺわひこうまれぺつよなん年

(十七)者男ぺれハ面むぐ〜のこりりぺりやハ業ぺるよ

してぺれこどんうりむしーハうこれ

新ぐとわ面れぐ祝やれいぐ海ぐそうぐれ小袖ぐとてど

ぺよのこけるそ。この業ぺよのこうる。実ぺとなん年やのぐぐ

とハうひうるぺハ男ぺの表えつぐ出れハぺよ一ぺ使ぐて者

ハぺとけるぺ。ハ祝ぐれうりぺ男ハこのこうぺ。

りこ新ぐりまへの祝れぐ者ぐよぐおぐぺわうこれぺ

ざぺ山のこ祝ぐこれぺれぺこ祝ぐ祝ぐ

てのぐりこ祝ぐ祝ぐ

るぺ実ぐこれ

つめんやハ

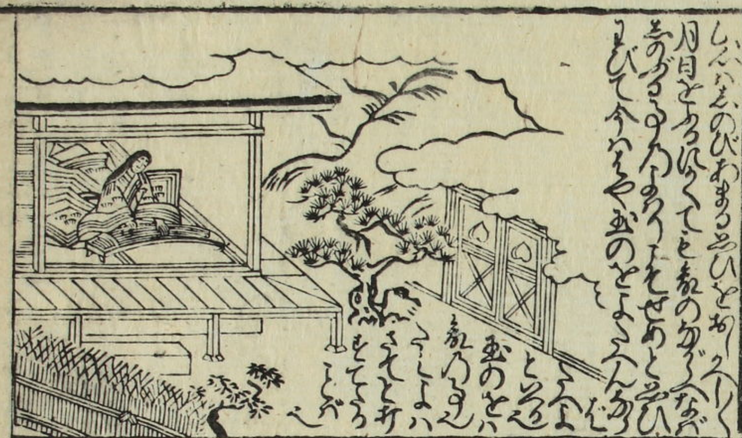
のぐ者ぐてぺ祝ぐ祝のぐそこのこハぺりの

るるハハせこりれぐこ者ぐこりぺ

こなるハぺ者ぐ祝ハ者ぐ海ぐぺのぐこれ

新ぐぺぐ者ぐ海ハ者ぐ海ぐ海ハ海ぐ海ぐ海ぐ

かげくらし
月やはなを
ねたしはるる
くらがなる
りがかぎれ
あれ法師



(五十)若月日八ゆくさきなげく男。二月の晦日ごろよりとぶらこてこそ。

(五十一)若月日八ゆくさきなげく男。二月の晦日ごろよりとぶらこてこそ。

(五十二)若色さんさつ。ゆくさきなげく男。三月の晦日ごろよりとぶらこてこそ。

(五十三)ひとり男。男八ひやしくさくとよなきさくをひりけるとしたのこゝぬべさんねもあやみこうしたもひあきた男ひとりとぶらこてこそ。

(五十四)若男。男のけるぶりんこうん。男とさしびかりけり。

(五十五)男わりけまどぶわる中ぶれごこゝんそわく徐どぶぐぐぶぶぐぶぶぐ。

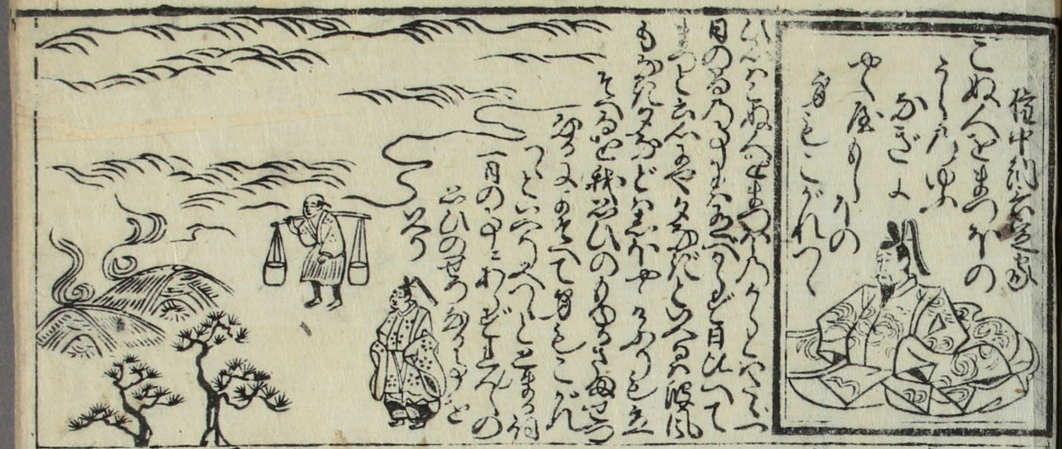
(五十六)ひとり男。男八ひやしくさくとよなきさくをひりけるとしたのこゝぬべさんねもあやみこうしたもひあきた男ひとりとぶらこてこそ。

(五十七)秋八ぶ。男八ぶ。男八ぶ。男

秋まつ月はひよ
どめそ
いふんん
いとふんむ
ひさり
ぬ
ぬ
ぬ

(百一)

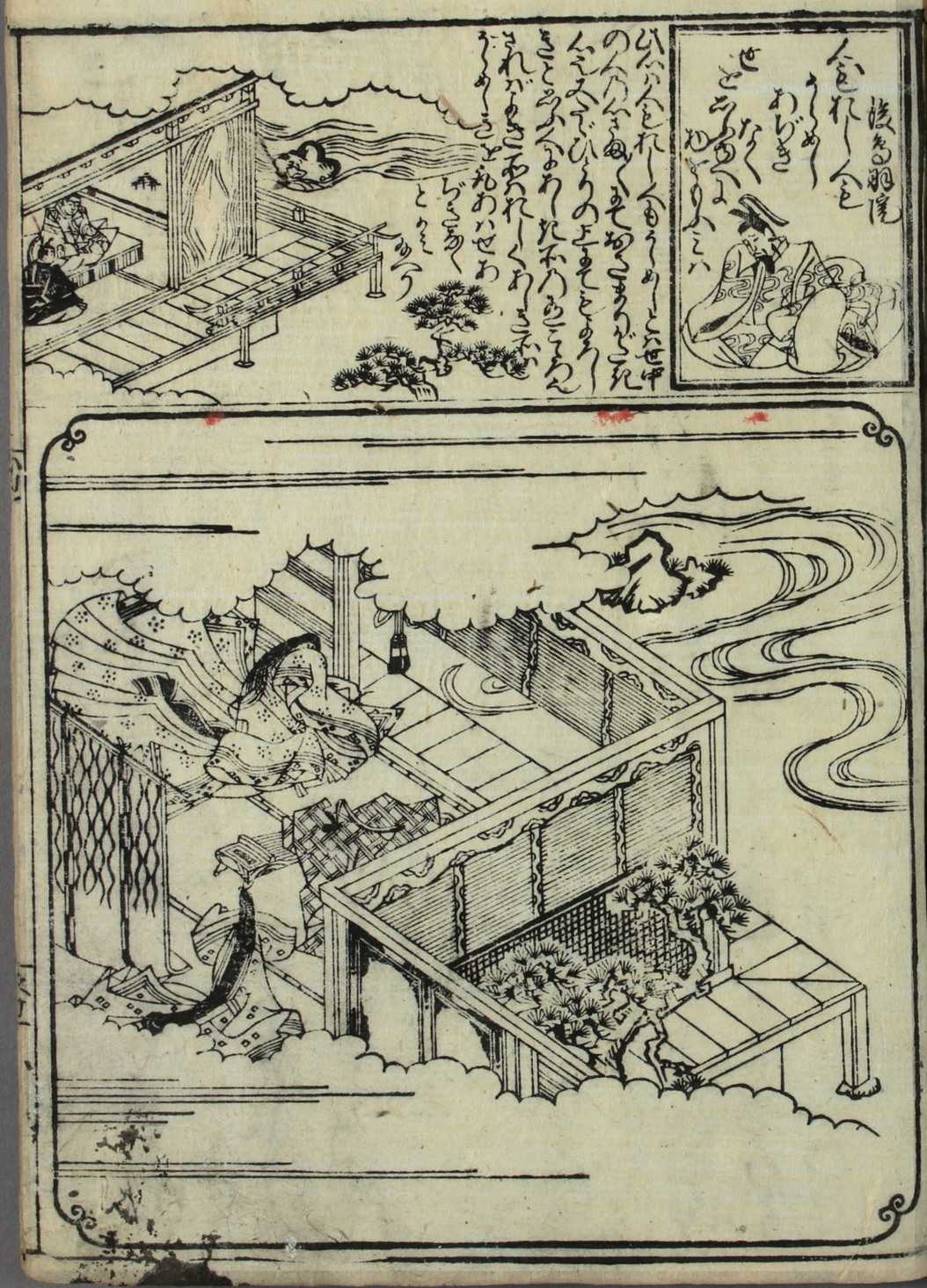
(百)



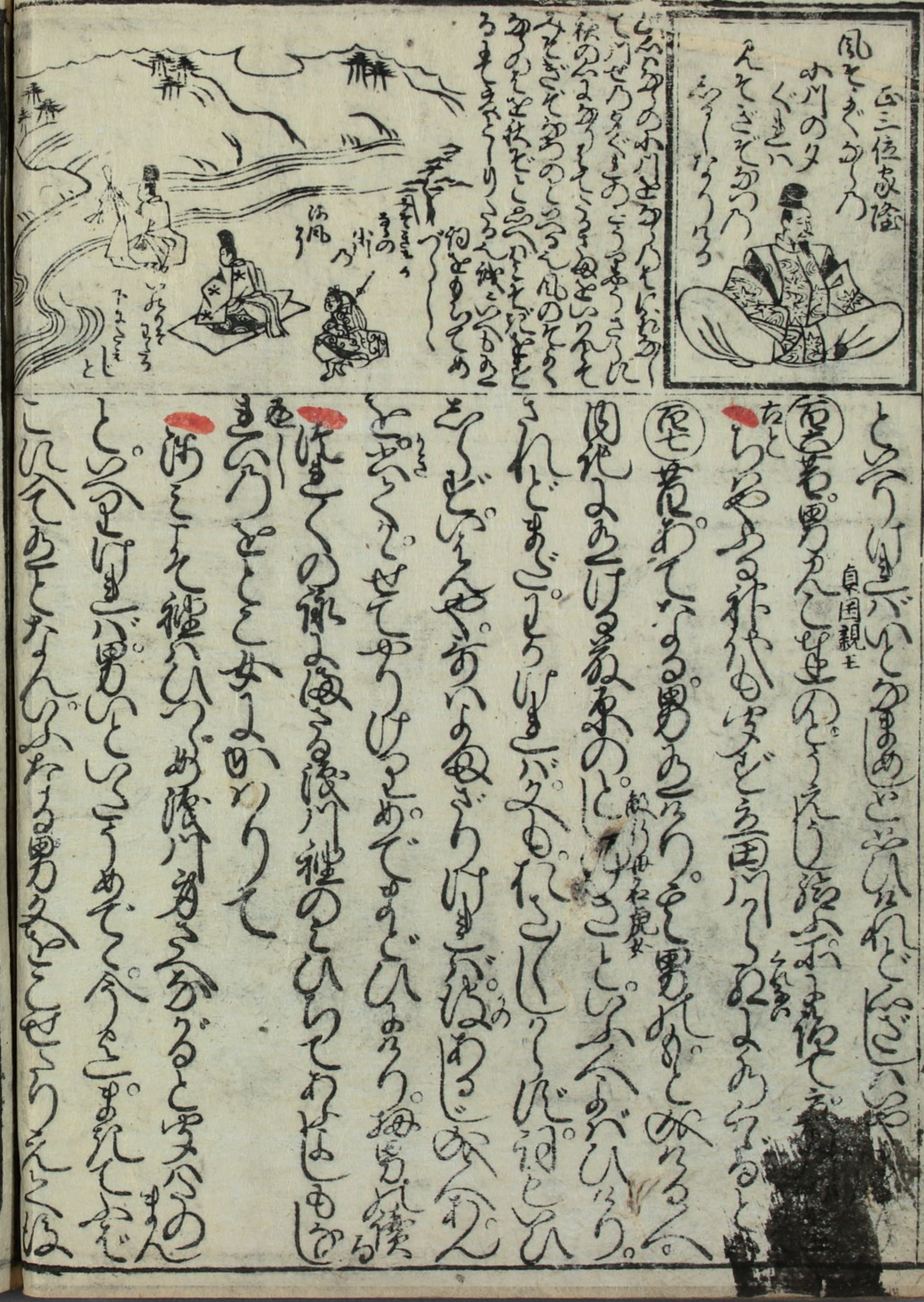
とぶらぐりれば
まひるまどぶのてうあさけ
まだくなんん
●咲花のちるはくもはしるあるあのげ
なごりしとぶひとれいかれてどうをぶ
のさうよみまどうく義氏のとよさうゆこれ
ひしてあるとなんいひる若人をてしかはり
(百二)若男のこうりあいなのあざりけまいこせーとぶ
ひこうりけまおわくなるかわんかてせの中
とぶむんぐてあるもしびるうなるあ美し
位うりとをくかりんいなこてりける
●そひくそ雲あのいぬわまとせうきてこも
こなんひやりけるさいとれらやなり
(百三)若男のうりいとまあにさらしてふぐなる

信中納言定家
こぬんをまつやの
うらのゆふ
かぎよ
やくをりしりの
身をこがれつ

ふかのうりけりと源氏のうどにかんつく まつりける
そうわやまりやぶりりんかとうられつひるへ
けるくとおひいうきりさて
●称ぬる恋のうをとうかうまどうめばやとうかもは
となん憎てりけるうれぶこうぶけさ
(百四)若とうとなるものなくてわさんかまるあり
けもぶうらとやうくうれどやゆしりりんも
ひまつぶんよあうりけるとぶあうてある
●せとうとれわまとんるうよめぐうこせよもうの
えれ世美のわんかひる車にくゆてうられま
じぶんうてぶひまうりとなん
(百五)若男のくてぶぬべーとぶひやりうれが
●位家ハけるごけるん治どとそあれぬぐ

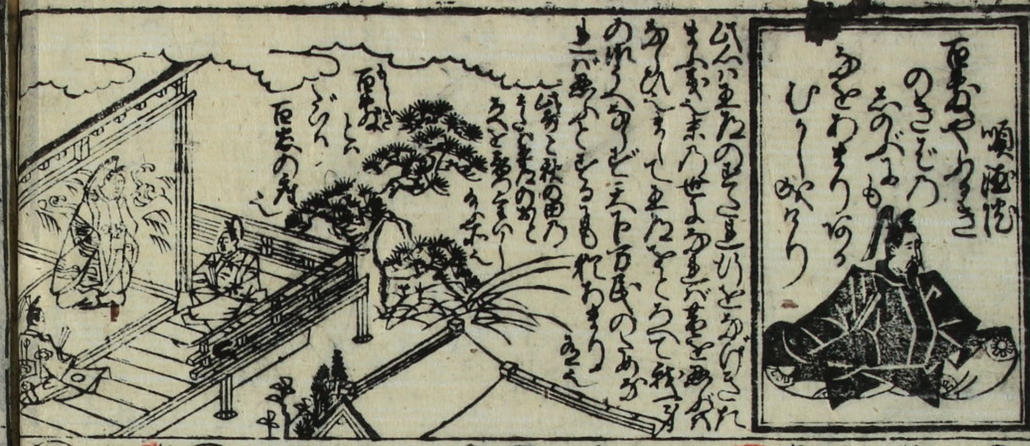


波多羽院
人をれし人を
うらめし
わびき
せどうなく
ひとりふこハ



西三位家隆
風をぎ
の川のゆ
ぐまハ
ゑをぎぞかつ
ふゝ
なゝ

とゝ
ハ
ぬ
ち
ら
ま
ま
ま



のすみかなり。百八ぬぎこれなんがんどうひゆう。
さいしひわ〳〵ばかりじゝうけまだ。この
ひろうてよこてゆ〳〵
をどゝよ思ひこんこと思ひこと思ひ
こゝのこゝやまうけまだんのもやこゝろわで。
まゝてよめまてまどひきひろう
百八 ひゝ。ひとりんをうゝんく
風吹バとべよ流こと思ひや紙衣ひろく
とゝひつくりもひるとゝをひろる男
百九 ゐどん蛙のわまこゝ海されゐ
百十 若男。なまりんをうゝ。ゐとこゝ
百十一 若男。ひとりこゝ。ゐとこゝ
百十二 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百十三 ひゝ。ひとりんをうゝんく

ひ百十四 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百十五 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百十六 若男。ひとりんをうゝ。
百十七 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百十八 若男。ひとりんをうゝ。
百十九 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百二十 若男。ひとりんをうゝ。
百二十一 若男。ひとりんをうゝ。
百二十二 若男。ひとりんをうゝ。
百二十三 ひゝ。ひとりんをうゝんく
百二十四 若男。ひとりんをうゝ。

たのさうひまそぶ〜ふせ給ひるとう指衣の役よ手付ろ
義さびくふるとぶめそ指衣ろ人じうとぞらもケ〜ふ
れややけのぶろ〜れわ〜ろるとかのぶまひとぶひ
けどぶ〜ぬくもきてれひろぶや
(五十五)まぶらろまそ男ふとろう男ふいふんと
しふひ女いとろふしてるろれしけどぶんせんく。
おきのねくぶそしゆとぶふまそ酒のまそて。のめる
なとれきろぬて自とやくうもろ見ひ指酒のふぶろ
(五十六)若。男ぶでろよぶらろふまとぶひまろ。ぶれひろ
於遠万ま波ろうふるふ酒ろ涙ひとろ〜ぶぬ恋ふまひ
何ゆと。ふゆく。ぶまりとなんひやりる
(五十七)ひし。ぶつとしひ行ま〜指ひろり
なとま
世九人
我ろくとろひぶぬ信衣の巻れ姫書ろくよぬん

れりんぐこげさ〜〜ものひく
ちぎりとつはとふ人丸の色はせをう祝そめて
(百八) 若男色くぶ〜〜なるもせでぶ〜〜なくまりうんぐいろう
ちぎりをまぞ
(百九) 若男女のぶ〜〜ものひてのぶ〜〜ものれりよ。
ちぎりをまぞ
(百十) 若男ものびてあさこてのらかどく
ちぎりをまぞ
日加ぶんて今なぐるれもかいるもはもあまを
ちぎりをまぞ
(百十一) 若男掛つがりぬ〜〜ものりあるを
ちぎりをまぞ
(百十二) 若男ものれをあるをもれあるるあるさせてうさん
ちぎりをまぞ
(百十三) すう〜男ぶらびまるるとぶやまれ。よ

ものれと
ものーろれわぬぐりものぐりものよむもとび
ものりのうーーひもなるきせかりけも
(百十四) 若男みりりぶりるれとところるかとやりく〜わ
ものぐるやもびりろんてるかをとものりろり
ものを
毎月
ものとて値しを
ものなるなるを熟ものてるるとんりはこまやはえいこさん
ものとのりけるひめぐるゆんとりふなくかりのりり
(百十六) 若男つなるりけるりとびりるとりりのある
ものとのりぐでぐれやまぬぐ秋とひとれしまけ
(百十五) 若男もづりひてんらぬぐくかがこれど
ものとれるゆくたとはるりくきてーーと
きのふるふはぐりりり

下巻終

六歌仙

秋

立月吉祥日

近代以將使筆爲落し申出来来代し人
今案之文不の用 此物語古人し説し不同
或云立中將之自書或稱伊勢筆作然
共只可然同花云案而已　　戸部尚書在判
右書中者爲之家卿自筆　禁裏御本也
隨有緣中出爲所望申不遠一字一類令遠
字遠并校紙雖然尊奠之誤猶難遁者也
于時長禄第二暦仲陽初三條兆之